

第4回 武庫川女子大学

研究成果の社会還元促進に関する発表会

武庫川女子大学 教育研究社会連携推進室

2020年2月21日(金)

武庫女ステーションキャンパス レクチャールーム

第4回研究成果の社会還元促進に関する発表会開催によせて

本発表会も、今年度で4回目を迎えました。従来は、本学図書館のグローバルスタジオで実施していましたが、今回は昨年10月に鳴尾・武庫川女子大前の高架下にこの武庫女ステーションキャンパスが完成しましたので、この場で開催ができることになりました。中央キャンパスから駅前に飛び出したことにより、本日お集まりいただきました学外の方々にとりまして、一層身近に感じていただける発表会になることを期待しています。

また、今までは他大学の先生をお招きしての基調講演、及び発表者との議論の場としてのポスターセッションを実施していましたが、しかし今年度は、各発表を実質的に充実させるため、基調講演及びポスターセッションを割愛し、各発表及び質疑応答の時間を従来の倍にすることにいたしました。その分、発表及び質疑にじっくりと取り組んでいただけたと思います。

様々な分野の発表がなされますが、実社会での諸課題に取り組んでおられる学外の皆様におかれましては、ご自身が関係する分野に直接関係がない分野の発表にも、なにがしか関連する事柄が出てくると思われます。この場をご活用頂き、発表される研究に対して率直な疑問や注文を投げかけていただき、相互により良い成果に結実するとともに、更に実社会と結ばれた新たな研究を生み出す契機となることを期待しています。

ご参加くださった皆様に、本学における研究成果を広く知っていただき、その社会での御活用をお考えいただく機会として、今回の発表会をご利用いただければ幸いに存じます。

2020年2月21日

教育研究社会連携推進室長 大坪 明

目 次

即興パフォーマンスの手法を用いた「協働による創造」としての学び -個々の受講者が「自分なりの」学びを深めるリフレクションをとおして-

< P.1 >

教育学科 講師 井谷 信彦	(概要) 学校、企業、自治体などにおける、児童生徒、社員、住民などによる「協働による創造」としての学びを推進する方法として、即興演劇の役者のトレーニング手法などとして知られるインプロゲームの活用価値を提案する。
------------------	--

西宮市鳴尾地区の地区課題の分布に関する調査研究 -鳴尾地区の団体別・区域別の課題の認識と一部課題の解決案について-

< P.5 >

教育社会連携推進室 特任教授 大坪 明	(概要) 鳴尾地区の自治会や老人会等に対して行った地区課題のアンケート調査から、区域や団体別の課題の所在を明らかにし、その指摘された課題中の一部が、空家問題の解決に連動して解決可能なことを示す。
------------------------	--

ウォーカビリティから見たオールドニュータウンの将来シナリオに関する試案 -北大阪都市計画区域の茨木市におけるスマートデクラインに向けて-

< P.19 >

生活美学研究所 助手 加登 遼	(概要) 自動運転、空き家活用、近居支援など、様々な取り組みが全国各地で展開される中、本発表は、ウォーカビリティの観点から、オールドニュータウンの高齢社会シナリオを試案する。
--------------------	--

線状開発地・甲子園の生活道路 -歩行者から見た自然と歴史的景観の調査-

< P.21 >

生活環境学科 教授 黒田 智子	(概要) 甲子園開発地と周辺道路の開発当時の計画図との比較分析、現在の道路・水路・松林・石碑等の調査の結果から、著名建築家・計画者による開発に現在顕在・潜在する魅力と問題点を整理。甲子園ホテルの当初案と実際の敷地条件を比較し、支配人林愛作の敷地選定の意図を考察。
--------------------	--

産学連携によるグローバル人材の育成
-国際業務力からの実践的な英語教育の接合-

< P.25 >

英語文化学科
准教授 三宅 弘晃(代表)
三浦秀松、山田慎人、
宇佐美彰規、辻和成

(概要)
産学連携を通じ、地元企業の英語事情を汲んだグローバル人材育成を目指す。そのため、セミナー、サービスマーケティング、企業研修を有機的に接合、学びをeポートフォリオに組織化しエンプロイアビリティを設計する。

健康づくり及び食育活動に関する地域と大学の連携の新しい展開

< P.33 >

食物栄養学科
教授 内藤 義彦

(概要)
西宮市在住の若い世代の健康課題を把握するため、定期健康診断結果を用いて、一人暮らし学生とそうでない学生(自宅等)との比較を通じて健康課題を抽出する。また、西宮市保健所と連携した健康づくりを進めるため、その端緒となる食育学生ボランティアの活動成果を紹介する。

大阪府豊能町における“健康まちづくり”の試み
-公園を活用して住み続けたいまちづくり-

< P.35 >

生活環境学科
教授 三好 庸隆

(概要)
豊能町ときわ台地区及び東ときわ台地区における街区公園の利活用実態と今後のあり方についての提案。



即興パフォーマンスの手法を用いた「協働による創造」としての学び —個々の受講者が「自分なりの」学びを深めるリフレクションをとおして—

井谷 信彦

武庫川女子大学 教育学部 教育学科

本発表は、学校、企業、自治体などにおける、児童生徒、社員、住民らによる「協働による創造」としての学びを推進する方法として、即興演劇の役者のトレーニング手法などとして知られるインプロゲームの活用価値を提案するものである。インプロゲームの取り組みに見られる「創造」には、①自己の創造、②関係の創造、③作品の創造という三つの契機がある。これら三つの密接な連関のなかで、他者と協働しながら学びを深めていく点に、インプロゲームの特徴がある。このとき、個別に異なる個性や関心をもった参加者が「自分なりの」学びを見つけて深める方法としてリフレクションがある。インプロゲームとリフレクションを組み合わせることによって、一般論を暗記するのとは異なる、体験をとおした自己に固有の学びが生まれる。以上のような知見に基づいて現在発表者は、おもに教育・福祉関係者向けのワークショップや、素人から玄人まで誰もが自由に参加できる即興芸術イベントを、それぞれ1ヶ月～2ヶ月に1度のペースで開催している。

キーワード：即興、協働による創造、リフレクション、学校教育、企業研修

1. 発表の趣旨

本発表は、学校、企業、自治体などにおける、児童生徒、社員、住民による「協働による創造」としての学びを推進する方法として、即興演劇の役者のトレーニング手法として知られるインプロゲームの活用価値を提案するものである。

2. インプロゲームとは？

インプロゲーム (improv game) とは、即興演劇の役者のトレーニング手法として開発されてきたものであり、シンプルな連想ゲームから、特定の条件を設けたシーンづくりまで、即興の技量を高めるための様々な活動が含まれている⁽¹⁾。

即興で興味深いストーリーをつむぐためには、高い創造性や他者との協働性が求められる。またこれらを支える表現力、理解力、想像力、発想力などを養うことも重要である。インプロゲームには、これらの資質・能力を養成するために有効な要素が、数多く含まれている。これによって即興

演劇の役者たちは、共演者との協働によって1つの舞台を創りあげる、即興パフォーマンスのスキルを培っていくのである⁽²⁾。

以上のような資質・能力は、即興演劇の舞台上だけではなく普段の社会生活においても、非常に重要なものばかりである。このため現在インプロゲームは、日本を含めた世界各国で、役者の稽古のみならず、企業研修、学校教育、社会教育などに、幅広く活用されている。インプロゲームを用いた研修のテーマは、対人関係スキルの育成や、チームワークの向上、イノベーションの促進など多岐にわたっている⁽³⁾。

3. 「創造」の三つの契機

インプロゲームの取り組みに見られる「創造」には大きくわけて三つの契機がある。すなわち、①自己の創造、②関係の創造、③作品の創造の三つである。以下これらを順に見ていこう。

3-1. 自己の創造

インプロゲームの参加者らは、活動をとおして新たな自己を創造していく。これまで抑圧されていた自分の欲求、感情、願望などが、改めて自覚されることもある。自分が何に喜び／悲しみを覚えるのか、何を楽しみ何を恐れるのか、何が得意／苦手なのか、自己の性格や特性が再発見される。自意識の奥底に埋もれていたその人らしい発想や言葉が、ゲームのなかで自然に発露してくることもある。インプロゲームは自分との出会いなおしをとおして、新たな自己を創造するための機縁となりうるものである。

3-2. 関係の創造

またインプロゲームには、参加者同士の関係を構築していく働きもある。ゲームは、機知・機転が求められる課題に共に挑戦したり、失敗を一緒に笑いあったり、お互いの発想を活かして作品を創ったりする機会を提供する。参加者はこうした体験をとおして、お互いのことを知り合い、自分の発想を他者に受け止めてもらえる喜びや、他者の発想に触発される楽しさを何度も味わう。これによってインプロゲームは、参加者同士が密接にコミュニケーションをとり、より豊かな関係を築くための機会を提供するのである。

3-3. 作品の創造

加えてインプロゲームには、即興のシーン作りはもちろん、身体のパーズによる風景画作りや、言葉だけを使ったストーリー作りなど、さまざまな創作の機会が多く含まれている。これらすべてまたはほとんどにおいて、事前準備のない即興による創作が求められるところが、インプロゲームの大きな特徴である。この「即興」という要素が加わることによって、インプロゲームは、綿密な計画や慎重な準備にもとづく制作とは異なった、興味深い作品が生まれる機会となる。

3-4. 三つの契機の相互関係

これら三つの「創造」の契機のうちどれに重点を置くのかは、実施される研修の趣旨によって変わってくる。たとえば、対人関係スキルの育成がテーマであれば「自己の創造」が、チームワーク

の向上がテーマであれば「関係の創造」が、またイノベーションの推進がテーマなら「作品の創造」が要点になるだろう。だがいずれの場合も、他者との協働をとおして自己、関係、作品の創造に取り組むという点が肝要である。

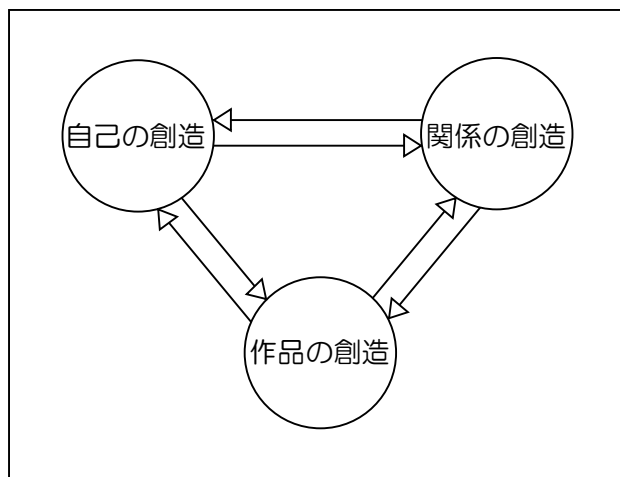


図1 インプロゲームに見られる「創造」の三つの契機

もちろん、これら「創造」の三つの契機はバラバラに現われてくるわけではなく、相互に密接に関わりあっている。「作品」をつくるなかで参加者同士の「関係」が変わり、「関係」が変化することで「自己」も変容していく。「自己」が変容すれば他者との「関係」にも変化が起これ、創作される「作品」も当然変わってくる。このように、自己の創造、他者の創造、作品の創造の密接な連関のなかで、他者と協働しながら学びを深めていく点に、インプロゲームの特徴がある。

4. リフレクションと「自分なり」の学び

4-1. リフレクション

このインプロゲームの意義・効用について発表者は、特に個々の参加者の「自分なりの」学びに目を向けて研究を進めてきた。

異なる個性をもった参加者にとって重要なのは、一般論として何を教わったかではなく、自分自身の体験から「自分なりに」何を学んだかである。この「自分なりの」学びを見つけて深めるための方法としてリフレクション（reflection）がある。リフレクションでは、インプロゲームをとおして感じたことや、感情の動きなどを振り返ることに

より、参加者一人ひとりが「自分にとって」重要な学びの契機を見つけていく。また、他者によるリフレクションにも耳を傾けることにより、自分の体験との異同を確かめながら学びを深めていく。こうして参加者はここでも他者と協働しながら、一般論には回収できない「自分なりの」学びを見つけて深めていくのである⁽⁴⁾。

4-2. 「人見知り」をめぐる意識変容

ここからは発表者による最近の研究成果から、インプロゲームの参加者の「人見知り」をめぐる意識変容に関するものを紹介したい⁽⁵⁾。

発表者が担当している授業「遊び心とコミュニケーション」では、毎回受講者がインプロゲームを体験したうえで、体験中に感じたこと、考えたことなどをノートに記録していくという取り組みを行っている。このノートに毎年見られる話題が「人見知り」である。自分は人見知りでコミュニケーションが苦手だという受講者は多い。発表者は拙稿（2019）において、この人見知りに関する受講者の記述が、15回の授業をとおしてどのように変化していったのかを分析することで、個々の受講者の学びの実態を明らかにした。複数の受講者によるノートを分析することで明らかにされたのは、一人ひとり異なる人見知りをめぐる学びの個別性・多様性である。

ある受講者はインプロゲームの体験に人見知りを乗り越えるだけの「楽しさ」を認め、みずから積極的に活動に参加していくことで「楽しさ」が増大することを学んだという。別の受講者は自分から他者へと関わることに怖れを抱きながらも、自分から他の受講者に話しかけたい、自分の思いを的確に伝えられるようになりたい、緊張のせいで息苦しくなるのを変えたい、授業の仲間以外の人々とも怖がらずに関わりたいと、回を追うごとに課題意識を発展させていっている。最終回の振り返りのなかで彼女は、「強制」がなければ他者と一緒に何かに取り組むのも苦痛ではないことや、相手との関係が変わればコミュニケーションも楽しめることを、発見したと綴っている。

また別の受講者は、自分ほどに他者に関わるのが苦手な人間はいないと思っていたが、インプロ

ゲームのなかで他の奥手な受講者の個性に心を惹かれる体験をとおして、他の人々も大なり小なり人間関係への苦手意識をもっていること、だからこそ自分から積極的に行動することが重要であることを学んだという。さらに、「自分は人見知りではない」と書いていた別の受講者は、最初は活動に消極的な受講者を「笑顔にさせたい」と思っていたが、インプロゲームをとおして自分のなかの「怖れ」や他者の「怖れ」に心をよせることで、「人の在り方に正解はない」という洞察に至ったことを綴っている。

4-3. 「自分なりの」学びのために

このように、インプロゲームとリフレクションを組み合わせることによって、一般論を暗記するのとは異なる、体験をとおした「自分なりの」学びを深めることができる。前節にあげた「創造」の三つの契機に照らしてみるなら、この人見知りをめぐる意識変容は、作品の創造と関係の創造に支えられた、新たな自己の創造であると見るができるだろう。もちろん——複数の受講者が書いているように——、授業を離れた他の場所での人間関係のなかでも、この「自分なりの学び」を活かしていくことは、これから彼／彼女らが継続的に取り組むべき課題であるといえる。

5. 即興の知恵を社会に活かす

以上のような知見に基づいて、現在発表者は、おもに教育・福祉関係者向けのインプロゲーム・ワークショップや、素人から玄人まで誰もが自由に参加できる即興パフォーマンス・イベントを、それぞれ1ヶ月～2ヶ月に1度のペースで開催している。前者は学校・幼稚園の教員を中心に、教員志望の大学生、保育・心理・医療などの専門家、舞台俳優など様々な参加者を得て、毎回教育者や保育者の専門性をめぐる学びを深めている。後者も1歳の乳児～還暦を超える年配者まで、また音楽や演劇の専門家からまったくの初心者まで、多様な人々の関心を集めており、毎回即興の醍醐味を心ゆくまで味わう会となっている。特にこちらは、教育・福祉関係者と芸術関係者が出会う場として

も、貴重な役割を果たしている⁽⁶⁾。

インプロゲームの背景にある「即興の知恵」は、教育・福祉以外にも社会の多くの分野で、広く活かすことのできる価値と射程をもっている。今回の発表会を機として、インプロゲームの活用機会がさらに広がっていくとすれば、発表者としては望外の喜びである。ぜひ皆さまのご批判とご助言をたまわりたい。

註

- (1) インプロゲームを紹介したものとしては、例えば、絹川友梨（2002）『インプロゲーム——身体表現の即興ワークショップ』晩成書房などを参照。
- (2) 即興演劇やインプロゲームの理念を説明したものとしては、例えば、K. ジョンストン著、三輪えり花訳（2012）『インプロー——自由自在な行動表現』而立書房などを参照。
- (3) 日本におけるインプロゲームの活用について知りたければ、高尾隆・中原淳（2012）『インプロする組織——予定調和を超え、日常をゆさぶる』三省堂や、武田富美子・渡辺貴裕（2014）『ドラマと学びの場——3つのワークショップから教育空間を考える』晩成書房などが参考になる。
- (4) 例えば教師のリフレクションについて書かれた書籍として、F. コルトハーヘン編著、武田信子ほか訳（2012）『教師教育学：理論と実践をつなぐリアリスティック・アプローチ』学文社や、渡辺貴裕（2019）『小学校の模擬授業とリフレクションで学ぶ授業づくりの考え方』くろしお出版などが参考になる。
- (5) 井谷信彦（2019）「インプロゲームをととした『人見知り』をめぐる意識変容——受講者の学習記録から読み解く「自分なりの」学びの生成」『学ぶと教えるの現象学研究』18
- (6) 発表者が主催しているワークショップの詳細（趣旨、日程、活動概要など）は当日配布予定の資料を参照。

西宮市鳴尾地区の地区課題の分布に関する調査研究

鳴尾地区の団体別・区域別の課題の認識と一部課題の解決案について

教育研究社会連携推進室長 特任教授 大坪 明

西宮市鳴尾地区では、高齢化等に伴い様々な課題が出現している様である。地区でコミュニティ活動する諸団体が、課題があると認識している分野を調べるために、アンケートで「子育て」、「青少年育成」、「高齢者支援」、「住民の健康」、「地域の防犯」、「地域防災」、「学び直し・知識増進」、「コミュニティ活動」、「商業活動」の9分野に4～6の課題項目を設け、課題だと認識する項目を指摘してもらう調査を行った。それを分析した結果、異なる団体や区域での指摘が多い課題分野・項目で共通あるいは異なる認識が概ね明らかになった。また、課題の一つである「空家」は、活用が出来れば他の課題を解決する手段にもなることが判った。

キーワード：西宮市鳴尾地区、地域課題、地域団体（自治会・老人会等）、空家

1. 研究の背景と目的

西宮市の人口は、阪神大震災直後に大幅に減少したが、その後順調に回復し、平成28年12月の推計人口は488,900人までになった。しかし、近年は漸減傾向である。一方、本学周辺の鳴尾地区は、現在面積9.5km²、西宮市の人口の2割近い約9.4万人を擁する。戦後に大規模住宅団地の建設などで市街地開発が大きく進展したが、昨今は住民の高齢化と共に、幼稚園や小学校の閉園・閉校や、商店街や市場などのシャッター街化、空き家の増加等、様々な分野において活力が減退し、課題が目立つようになってきている。

地区のどの分野の課題がどの場所で顕著なのか、それらの発生している課題の種類と場所を理解することは、その解決に向けた端緒である。本調査は、鳴尾地区での課題の分布の概略を明らかにし、西宮市の課題の解決と都市活力の回復の一端に繋げることを目的とする。

2. 研究の方法

地域住民が課題と認識する事項を包括的に理解するために、表-1記載の団体の長に対してアンケート調査を行った。その内容は、「子育て」、「青少年育成」、「高齢者支援」、「住民の健康」、「地域の防犯」、「地域の防災」、「学び直し・知識増進」、「コミュニティ活動」、「商業活動」の9分野に関し、

各々4～6項目の課題を設定し、当該項目を課題と認識する場合に○印を付し、具体的内容を記述するものである。団体の長の回答に地域住民の認識がどの程度反映されているは不明だが、団体長が地域の状況を把握している前提であり、また例えば個人的意見でも同一項目を複数指摘すれば、そこに課題の存在を認めた。各団体への配布と回収の状況を表-1に、集計結果を表-10、-11に示す。団体により認識が異なると仮定し、「自治会」、「老人クラブ」、「社会福祉協議会・民生児童委員協議会・青少年愛護協議会・小学校PTA」の3集団に地域団体を分けた。なお、鳴尾浜連絡会は企業の集団なので個別に扱う。また、例えば災害では、南は津波等の心配があり、東は武庫川の決壊の心配があるという様に場所で課題が異なると考えられるので、地区を阪神電車の軌道を境に南北、小曽根線～鳴尾川を境に東西に、図-1の様に4区域に分け、これらの集団・区域毎に集計し考察する。

指摘数が各項目の課題としての認識の程度を現すので、団体別・区域別に指摘数を集計するが、項目の課題としての重要度の判断材料として、指摘の合計を集団の母数で割った値が0.3以上の項目を当該団体・区域の重点項目とした。また、分野の課題としての重要度の判断指標として、集団・区域別の総指摘数の中に分野毎の指摘数の合計が占める割合を算出した。しかしこれでは、分

野毎の項目数が異なり、項目が多い分野の割合が高くなる傾向があるので、別の指標として分野毎の指摘数合計を分野の項目数で割った、分野の平均指摘数を用いた。そしてその双方の上位3位までの共通する分野を重要課題分野とした。

表-1 配布団体と配布数 (R 元年 8～9 月に配布・回収)

団体名	配布数	回収数	回収率%
鳴尾連合自治会加盟自治会	44	31	70.5
鳴尾地域内の単位老人クラブ	86	48	55.8
鳴尾地域内の地区社会福祉協議会	7	11	37.9
同上 校区民生委員児童委員協議会	7		
鳴尾地域内の青少年愛護協議会	7		
小学校 PTA	8		
鳴尾浜連絡会	1	1	100.0

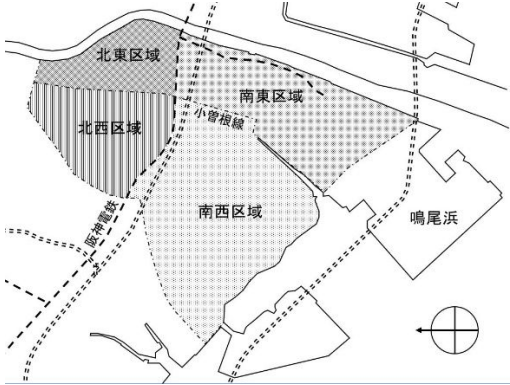


図-1 鳴尾地区区域分け図

3. 西宮市及び鳴尾地区の4区域の人口特性

地区の特性として、人口の年齢構成を把握する必要があると考え、日本全国及び西宮市全体と鳴尾地区の0～14歳、15～64歳、65歳以上の人口を表-2で比較した。同表では、西宮市全体は全国平均より0～14歳人口と15～64歳人口の割合は高く、65歳以上人口は低い。一方、鳴尾地区は、0～14歳及び15～64歳人口の割合は全国平均を若干上回り、高齢化率は若干下回るが、西宮市平均より、0～14歳と15～64歳人口の割合は下回り、65歳以上人口は大きく上回っている。即ち鳴尾地区は、西宮市の中では高齢者が多いといえる。

上記4区域に関し、その住民の年齢構成の要因も勘案するために、令和元年6月の5歳階級別人口推計のグラフを図-2に示し、それを基にその特性を把握する。各区域の人口の年齢階層別分布の特性は、次の通りある。

表-2 全国、西宮市、鳴尾地区の年齢階層別人口構成比較

エリア 年齢階層	日本全国		西宮市		鳴尾地区	
	実数(千人)	%	実数	%	実数	%
総人口	126,314	0	484,418		93,817	
0～14歳	15,376	12.2	67,279	13.9	11,749	12.5
15～64歳	75,317	59.6	301,817	62.3	56,716	60.5
65歳～	35,624	28.2	115,322	23.8	25,352	27.0

出典：日本全国（令和元年6月時点の総理府統計局推計値）

西宮市及び鳴尾地区（令和元年6月時点の住民基本台帳推計値）

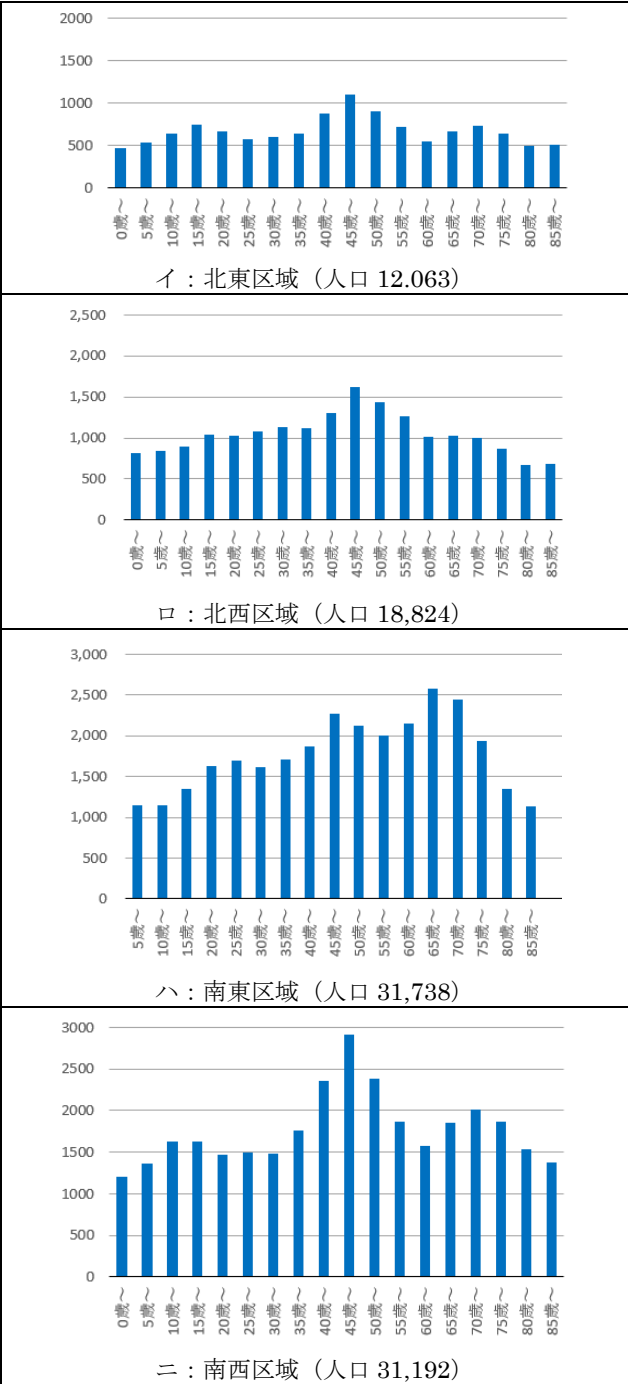


図-2 4地区の5歳階級別人口特性

（令和元年6月の住基台帳による推計からグラフ化）

北東区域（図-2-イ）は人口が少ないが、45 歳代を頂点に 15 歳代と 70 歳代に小ピークがある 3 コブ型で、高齢者・働き盛り・若者の塊があり、極端な高齢化はしていない。平均世帯人員は 2.23 人と 4 区域で最も多い。0～14 歳人口は平均 13.6%だが、小曽根 1 丁目・4 丁目、小松北町 1 丁目・2 丁目、小松東町 2 丁目、小松西町 1 丁目で 15%を超えている。一方、高齢化率は平均 25.2%だが、小松西 2 丁目、小松南 1～3 丁目で 30%を超え、小松南町 1・2 丁目は 40%前後と区域中で特に高い。

北西区域（図-2-ロ）は、45 歳代を頂点に両側に向けて徐々に下る 1 コブ型で、働き盛りが最も多い。平均世帯人員は 2.22 人で北東区域に近い。0～14 歳人口の平均は北東区域と同じだが、若草町 1 丁目・2 丁目及び甲子園三番町・四番町で 15%を超えている。高齢化率は平均で 22.6%で、上鳴尾町が 29.3%と高いが、30%を超える町丁は無い。

南東区域（図-2-ハ）は、65～70 歳代が最も多く、次に 45～50 歳代にピークが見られ、次に 25 歳代にも小ピークがあるが、総じて 65 歳代～70 歳代に向けて右上がりである。平均世帯人員は 1.99 人で最も少ない。0～14 歳人口は 10.8%と 4 区中で最も少ないが、上田中町は 14%と当地区内で最も高い。高齢化率は区域平均で 30.2%と 4 区域の中で最も高く、東鳴尾 1 丁目、上田西町と人口の多い高須町 1・2 丁目が 30%を超えている。

南西区域（図-2-ニ）は、45 歳代が突出して多く、次に 65～75 歳代、その次に 10～15 歳代が多い 3 コブ型だが、北東区域に比べ高齢者が多い。平均世帯人員は 2.07 人である。40～50 歳代の子育て世帯が多く、子供世代の増加が見込まれそうである。0～14 歳人口は区域平均で 13.2%、南甲子園 1 丁目～3 丁目、浜甲子園 1・2 丁目・4 丁目で 15%を超えている。高齢化率の区域平均は 27.2%だが、鳴尾町 2 丁目で 30%を超え、特に古川町・枝川町では 40%を超えている。

4. 自治会の分析

区域毎の重要課題分野を把握するために、区域毎に各分野の指摘割合を図-3 で、平均指摘数を図-4 で比較した。更に各分野の課題項目の意識度を見るために、表-3 で分野毎の課題項目の区域別の

指摘数を積み上げグラフにし、アンケートの関連記述も併せて纏めた（以下、各団体とも同じ）。集団での分野別に注目を集めている課題項目を知るために、積み上げグラフの指摘数合計の上位 3 位の項目を集団の注目項目とした。また、2 節で述べたように、区域別・分野別に重要と認識されている重点項目を合計欄に薄墨表示した。

区域毎に重要と認識する課題分野については、図-3、-4 から分野別の指摘割合と平均課題指摘数の上位 3 位の分野を表-4 に抽出し、双方共通の分野を重要課題分野とした（表中の太文字）。各区域での課題が多い分野がある程度明らかになった。

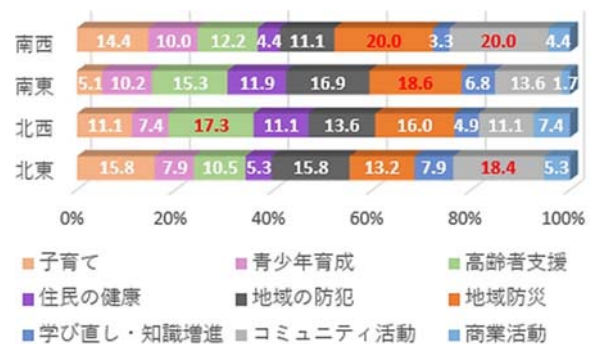


図-3 自治会の区域別の分野の課題指摘数の割合

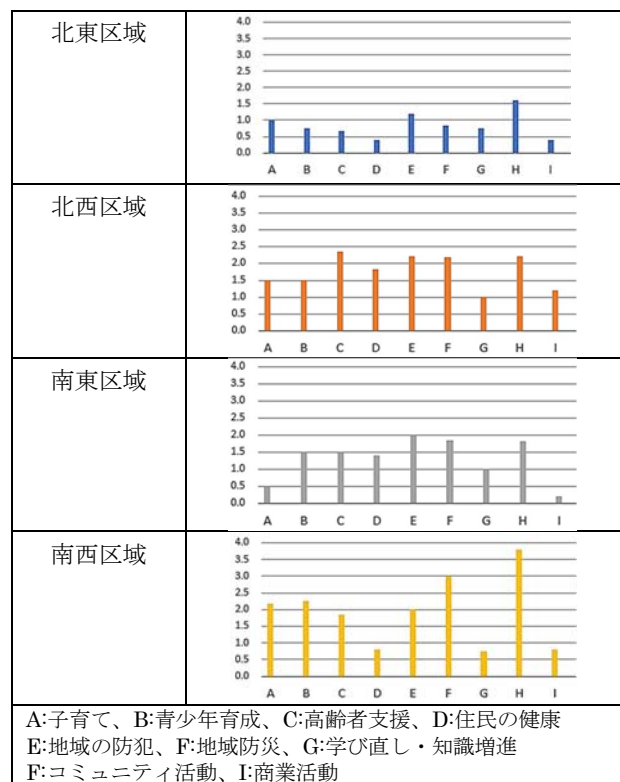


図-4 自治会の区域別 各分野での課題項目平均指摘数

表-3 自治会での分野別・区域別の指摘数・注目項目と記述内容

A:子育て	B:青少年育成	C:高齢者支援
注目項目＝学童保育、保育園、幼稚園	注目項目＝スポーツ等活動支援、学習支援	注目項目＝認知症予防、介護支援
記述内容： ・6年生までの学童保育、児童の放課後の居場所 ・保育園の待機児童の多さ ・公立幼稚園の閉園、別な公立園は遠い ・育児・発育相談の体制と広報の強化 ・子育て広場だけでは乳幼児の横の繋がりが不足、未就学児親子が気軽に集える場所が必要	記述内容： ・市によるスポーツ活動や野外学習の強化 ・経済的に恵まれない児童の学習支援、相談場所の広報、地域内・自治会内の支援 ・非行を青愛協で協議、保護者との接触要 ・児童見守り隊の高齢化 ・発達障害児の扱い	記述内容： ・独居者の認知症、察知が困難 ・認知症の具体的予防策・改善手段を知りたい ・介護相談方法が判りづらい、相談がしにくい ・在宅介護を目指した行政の支援策の充実 ・日々の安否、要支援者の避難誘導方策に苦慮 ・自治会長、民生委員、専門員等が協議・研究中
D:住民の健康	E:地域の防犯	F:地域防災
注目項目＝健康相談、その他	注目項目＝空家問題、不審者対策	注目項目＝防災備え、避難施設、避難警報
記述内容： ・関心があるが実行に移さない人が多い ・健康管理に具体的方策なく、対応に苦慮 ・相談場所の広報に注力 ・高齢者の健康寿命延長の支援策充実 ・親子で気軽に運動ができる機会が欲しい	記述内容： ・自然災害の家屋被害を放置、景観上課題 ・空家増に行政が前面に出た対策が必要 ・犯罪の温床にならない様に空き家対策を ・学校周囲の不審者、子供の安全が不安 ・防犯カメラ等を privacy に配慮し活用 ・特殊詐欺対策 ・犯罪の程度・内容を知りたい	記述内容： ・防災備品や自主避難の確認、協力員の高齢化 ・備えが多面的過ぎて難しい ・防災施設の周知が必要、避難施設が遠く不便 ・災害に関し年1回話合う程度で、具体策苦慮 ・津波に対し避難施設が大丈夫か不安 ・避難施設の対策が万全か（停電対策、簡易トイレの数等） ・警報、スピーカーが聞こえない
G:学び直し・知識増進	H:コミュニティ活動	I:商業活動
注目項目＝教養・文化、その他	注目項目＝自治会、子ども会	注目項目＝空店舗等の増加
記述内容： ・近隣諸国条項等歴史・外交・安全保障等の正確な知識 ・住民の教養・文化向上にもっと積極的に ・気軽に参加できる講演等が必要、頻度を増す ・文化活動で住民相互の触れ合い増、公民館活動等 ・再就職・復帰の支援、学童の基準撤廃・受入増 ・歴史資源や謂れの啓蒙・地域の独自性醸成への補助制度	記述内容： ・高齢化で役員のなり手が無い、退会者の続出 ・自治会活動の的をしぼるのに苦慮 ・活動参加者の募集 ・相互扶助と思える活動を模索中 ・子供が増えたが役員になるのが嫌で子ども会未入会	記述内容： ・市場が閉鎖された ・町がさびれ、人の流れにも影響がある ・旧国道沿いでも集客が困難、大きな範囲で集客・活性化の工夫が必要 ・後継者不足による店舗の閉鎖

凡例：■北東（5件）、■北西（7件）、■南東（7件）、■南西（11件） 但し（ ）内は母集団の件数

表-4 自治会での地区ごとの重要課題分野

区域	分野別指摘数の割合	分野別平均指摘数
北東	コミュニティ活動、子育てと地域の防犯、地域防災	コミュニティ活動、地域の防犯、子育て
北西	高齢者支援、地域防災、地域の防犯	高齢者支援、地域の防犯、地域防災、コミュニティ活動
南東	地域防災、地域の防犯、コミュニティ活動	地域の防犯、地域防災、コミュニティ活動
南西	コミュニティ活動と地域防災、子育て、高齢者支援	コミュニティ活動、地域防災、青少年育成と子育て

また表-3 からは、9 分野の中で自治会全体で重要と認識する課題の分野とその項目がかなり明らかになった。特に、指摘数の多かった「認知症予防」、「空き家問題」、「防災備え」、「自治会」（特に役員の成り手）の項目に関しては、鳴尾地区の重要課題であるということが出来るだろう。同時に、「記述内容」からは、それらの具体的内容も少しは明確になった。また表-10 では、重要課題分野に入っていない重点項目も注意を要する。

北東区域：「子育て」、「地域の防犯」、「コミュニティ活動」が重要課題分野である。当区域は0～14 歳人口が多く、「子育て」では小松幼稚園の休園で「幼稚園」が第一の課題とされ、また待機児童の存在も指摘されている。「コミュニティ活動」では、「自治会役員の成り手が無い」問題、そして「地域の防犯」では「空き家問題」が大きい課題と認識されている。その他、表-10 では指摘を2 件受けて定義上でいう重点項目は多いが、母数が5 件と少ないので重点項目とは特定しにくい。

北西区域：「高齢者支援」の分野では、圧倒的に「認知症予防」が重点項目とされている。「地域防災」では、「避難施設」が重点項目で、「避難施設の周知」や「自治会館が避難施設になりえるのか」、「避難施設が本当に大丈夫か」といった疑問が寄せられている。「地域の防犯」に関しては、やはり「空き家問題」が重点項目として大きく認識されている。また重要課題分野以外の「健康相談」や「自治会」、「保育所」、「学習支援」、「運動相談」、「教養・文化」も重点項目であり、対処が必要である。一方、当区域でも公立幼稚園が閉園したが、その事自体は大きな問題としては挙げられていない。

南東区域：「地域防災」では「防災の備え」が重点項目で、「住民側の心構えや広報の不足」、「避難施設

設」の項目では「装備品や移動に関する不安」が挙げられている。「地域の防犯」では「不審者対策」が重点項目で、「防犯カメラの導入」や「警察の巡回」が要望されている。「コミュニティ活動」では、「自治会」が重点項目で、高齢化による「担い手不足」や「若年層の関心を引く活動」の必要性が挙げられた。その他重要課題分野以外の「介護支援」と「教養・文化」も重点項目となっている。**南西区域：**「コミュニティ活動」では「自治会」が重点項目で、その「担い手不足」や「役員の後継者問題」が大きな課題である。「地域防災」では「防災の備え」が重点項目で、防災活動を活発に行い住民にも情報は流しているが、「避難警報が出てから避難への移行」や「高齢者の避難手段」等が課題とされている。「子育て」では「学童保育」が重点項目で「終了後の見守り」や「民生委員に気軽に相談してもらう工夫」等が課題と判明した。また、重要課題分野以外の「スポーツ等活動支援」「認知症予防」、「空き家問題」も重点項目である。

各区域の共通点としては、「コミュニティ活動の担い手不足」がどの区域に関しても挙げられるが、南東及び南西区域では、海に近いことから「地域防災」への意識が高い点が共通している。しかし、南東区域では高層住棟があり避難はできるが、人口も多いので、防災の装備に関する課題があり、また南西区域は広いので、避難施設の量的な心配等がある。区域による違いが見て取れる。一方、北東及び北西区域では、「地域の防犯」に関して、特に「空き家問題」が共通の課題として認識されていることが判明した。

5. 老人会

区域の重要課題分野を把握するために、区域別に各分野の指摘割合を図-5 で、平均指摘数を図-6 で比較した。また、老人会の各分野の課題指摘と記述内容を自治会と同方法により表-5 に、集計結果を表-11 に纏める。表-5 からは、各分野で老人会が課題だと感じている項目がかなり明らかになった。特に指摘が多い「老人会」（会員増強や役員の成り手）、「認知症予防」、「健康相談」、「不審者対策」は、重点項目である。「記述内容」から、具体的内容も多少明確になった。

表-5 老人会での分野別・区域別の指摘数・注目項目と記述内容

A:子育て	B:青少年育成	C:高齢者支援
注目項目＝保育所、育児・発達相談、幼稚園 記述内容： ・待機児童の問題、遠くまで通園 ・小学校入学まで安心して子供を預ける場所が必要 ・核家族化で育児相談ができる人が少ない。育児や発達相談を気軽にできる所が欲しい。 ・幼稚園の休園 ・学童保育は6年生まで延長希望	注目項目＝スポーツ活動支援、非行対策 記述内容： ・施設開放でスポーツ支援を。学校の部活に頼り過ぎ、町内でスポーツ活動に協力して欲しい。 ・夜の巡回強化等、非行対策を行政も取組むべし。特に中学生の情報共有が必要。スマホの普及で問題が陰で発生。 ・学習支援のスタッフ確保が困難	注目項目＝認知症予防、介護支援 記述内容： ・一人暮らしの不安。講座等への参加者の意識 ・認知症や要介護になる前の予防知識を得たい ・認知症予防活動の更なる普及が望まれる ・介護支援が可能な人に助けてほしい。介護や生活支援は近隣住民では無理、施策強化を望む ・生活支援をなかなか受け入れてもらえない ・単身高齢者の健康状態が不明 ・免許返納に伴う日々の移動手段
D:住民の健康	E:地域の防犯	F:地域防災
注目項目＝健康相談、運動相談 記述内容： ・高齢一人暮らしで、健康や服薬に関する知識や気軽な相談の場、広報の注力を要望。 ・いきいき体操参加、相談も含め内容を要検討 ・運動の機会なく困っている、運動相談会の開催 ・多重服薬の問題 ・一人暮らしの栄養や塩分過多に関する指導 ・会合の場所が遠くて困る	注目項目＝不審者、空き家、犯罪発生 記述内容： ・監視カメラ設置は有効。子供に対する変質者の問題。対策内容。不審者対策に挨拶も重要、隣人同士の連帯を密にしたい。交番も月1程度巡回するが、不十分。 ・空き家や更地の増加傾向、対策が必要 ・詐欺・借金や中傷・人間関係に要注意。年1回空き巣話を聞く。夏場の性犯罪対策。	注目項目＝備え、経路、施設、避難手段 記述内容： ・武庫川の治水対策、氾濫時の避難訓練の実施。防災の備えと避難施設の場所確認。防災マニュアルの定期的勉強会が必要。2万人もの住民が居る団地なので備えが十分でない。 ・避難経路に標識が必要 ・一人暮らし老人、要支援の高齢者の避難支援 ・スピーカーの音が聞こえない
G:学び直し・知識増進	H:コミュニティ活動	I:商業活動
注目項目＝教養文化、再就職等用専門知識 記述内容： ・住民が参加しやすい行事が少ない。公民館の各種講演会参加者が限定的。老人問題全般に関して学びたい。老人には、判りやすい講話をしてほしい。武庫女でも付近住民に役立つ講座の開催をお願いする。教養の向上心があるが、会場が遠方で行けない。薬や健康の話を開きたい。 ・キャリアアップしないと再就職が困難	注目項目＝老人会、自治会 記述内容： ・会員増強、日頃の交流。役員のなり手不足。参加者減少。場所の問題から行事内容に限られ参加者減。男性加入者が少ない。各組織の交流・懇親の推進。 ・自治会加入者の減少。活性化 ・子ども会が無い ・婦人会の活動活発化が全ての会に元気を伝搬	注目項目＝後継者問題、空店舗の活用 記述内容： ・後継者の不在 ・空き店舗が増えて寂しい。賑わいが欲しい。大型店の急増には個店の集合では対応できない。メルカートの店舗がよく閉店される。 ・昔から比べると客が減少している。 ・大型店の来訪者の車が多いので困る。

凡例：■北東（9件）、■北西（10件）、■南東（17件）、■南西（12件） 但し（ ）内は母集団の件数

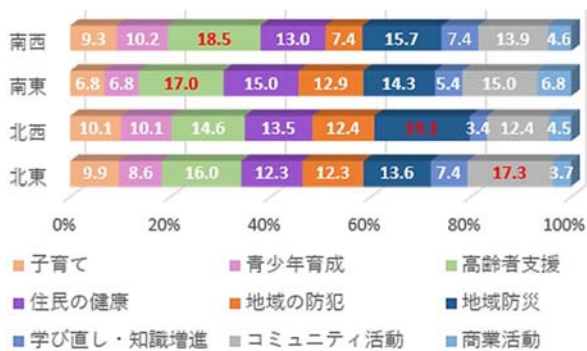


図-5 老人会の区域別の分野の課題指摘数の割合

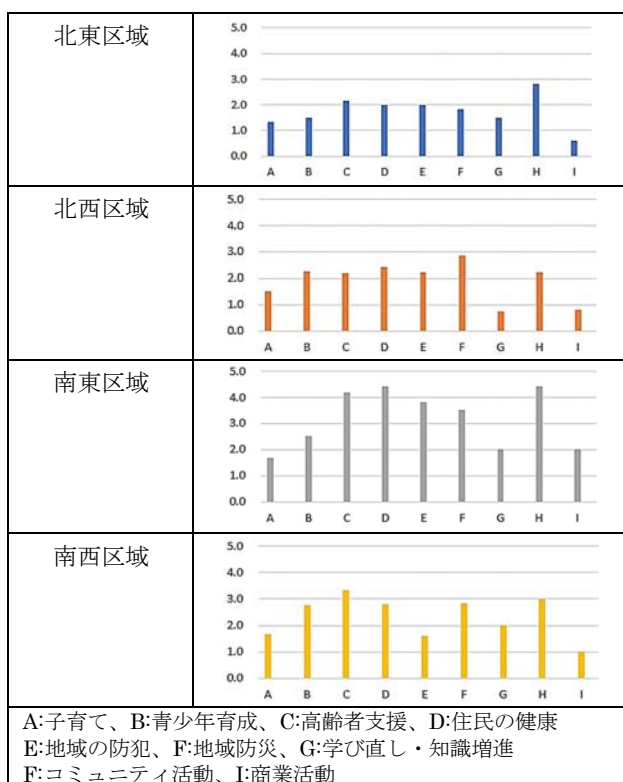


図-6 老人会の区域別 各分野の課題項目平均指摘数

図-5 と図-6 の双方で、指摘の多い順に上位 3 項目を表-6 に抽出したが、双方でほぼ共通の分野が挙がっており、その共通分野が同区域で問題の多い重要課題分野とした。

また表-5 から、9 分野に関して各老人会長が重要と認識する課題の分野と項目を抽出することができた。特に指摘の多い「認知症予防」、「健康相談」、「不審者対策」、「防災備え」、「老人会」（特に役員の成り手や参加者数）の項目は、老人会にとって大きな課題だということができるだろう。同時に、「記述内容」からは、それらの具体的内容も多少明らかになった。

表-6 老人会での区域ごとの重要課題分野

区域	分野別指摘数の割合	分野別平均指摘数
北東	コミュニティ活動、高齢者支援と地域防災	コミュニティ活動、高齢者支援、住民の健康と地域の防犯
北西	地域防災、高齢者支援、住民の健康	地域防災、住民の健康、青少年支援と高齢者支援とコミュニティ活動
南東	高齢者支援、住民の健康とコミュニティ活動、地域防災	住民の健康とコミュニティ活動、高齢者支援、地域防災
南西	高齢者支援、地域防災、コミュニティ活動	高齢者支援、コミュニティ活動、地域防災

北東区域：「コミュニティ活動」、「高齢者支援」が重要課題分野である。「コミュニティ活動」では「老人会」が重点項目で、「会員減」「参加者減」が問題とされている。「高齢者支援」では「認知症予防」が重点項目だが、それ以外に「一人暮らしの不安」、「高齢者に対する周囲の支援方法」等も課題とされている。高齢化率は区域平均で 25.2%と高くはないが、小松西町 2 丁目で 30%を超え、特に小松南町 1 丁目 37.3%、同 2 丁目 41.5%と極めて高いのが「高齢者支援」の指摘が多い原因と考えられる。重要課題分野以外の重点項目は多いが、特に「健康相談」の指摘数が突出している。

北西区域：「地域防災」、「高齢者支援」、「住民の健康」が重要課題分野である。「地域防災」では「避難経路」が重点項目で、「武庫川氾濫時の対策」や「要支援者の避難」等も課題との認識がある。高齢化率は 4 区域中で最低の 22.6%だが、「高齢者支援」では「介護支援」が重点項目であり、「介護支援や生活支援は近隣住民では無理」、「支援できる人が助けて欲しい」等の要望がある。「住民の健康」では「健康相談」、「栄養相談」、「服薬相談」の指摘が多いが、「いきいき体操で体力維持に努める」や、「運動がなかなかできず困っている」等の意見もある。また、重要課題分野以外の重点項目である「老人会」、「不審者対策」、「スポーツ等活動支援」も対応が必要である。

南東区域：「住民の健康」と「コミュニティ活動」、「高齢者支援」、「地域防災」が重要課題分野である。「住民の健康」分野では、「健康相談」が突出した重点項目で、「身近に相談する場が欲しい」が挙げられている。「コミュニティ活動」では、「老人会」が重点項目で「担い手」や「行事の参加者が少ない点」が大きな問題である。区域の平均高

齢化率は30.2%と4区域中で最も高く、上田西町と人口が多い高須町1丁目・2丁目30%を超えている。「高齢者支援」では「認知症予防」が突出した重点項目で、次に「介護支援」の指摘数が多い。やはり、高い高齢化率が原因と推察される。

「地域防災」分野では「避難手段」と「防災備え」が重点項目であり、「大規模団地での防災備えが十分か」、「高層団地で断水時の給水」等の高層団地特有の問題の指摘も多いが、一方で「防災対策に管理組合で取り組んでいるが、定期的に勉強会を実施して意識向上を図ってほしい」等の要望もある。後者は一見積極意見に見えるが、認識した当人が動く必要があるだろう。重要課題項目以外の「不審者対策」も重点項目で対処が必要である。

南西区域：「高齢者支援」、「地域防災」、「コミュニティ活動」が重要課題分野である。高齢化率は区域平均で27.2%だが、鳴尾2丁目で30.7%、古川町で49.9%、枝川町で43.0%と極めて高い。従って「高齢者支援」では「介護支援」と「認知症予防」が重点項目であり、「老々介護の支援を手厚く」や、「認知症予防の講習会」、また「免許証返納したので日々の移動手段の確保」の要望もある。「地域防災」では「防災備え」が重点項目で、「高潮に対して講じるべき対策は？」との質問があるが、他に「世帯の状況に応じた避難手段が、プライバシーの問題もあり明確に出来ていない」という苦悩や、「避難施設を素早く開けてほしい」という切実な要望がある。「コミュニティ活動」では、「老人会」が重点項目で、「加入者や参加者が少ない」、高齢化による「人材不足」がやはり課題である。重点課題分野以外では、「保育園」、「スポーツ活動等支援」、「運動相談」、「教養文化」も重点項目であり、対処が必要である。

6. 青愛協・民児協・PTA・社協

当グループでは、回収が29票中11票と少ないので、4区域まとめて集計・分析をした。青愛協・PTAは青少年や児童の課題に対応し、民生・児童委員協議会は高齢者や児童の課題に幅広く対応している。社会福祉協議会はそれに比べ、高齢者や障害者等を含む福祉全般に対応している。従って、当グループは児童から高齢者・障害者まで幅広い

層での課題をとらえることが出来ると考えられる。各分野の指摘割合を図-7で、分野別に課題項目の平均指摘数を図-8で比較し、分野別割合と平均指摘数の双方で共通に上位の3分野を重要課題分野とした。また、各分野での課題指摘状況を表-8にまとめ、表-10に各課題の指摘数を集計した（薄墨表示の内容は自治会と同様）。



図-7 グループの区域別の分野の課題指摘数の割合

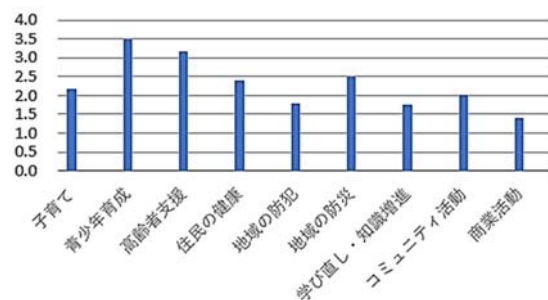


図-8 グループの各分野の平均指摘数

当グループでは、青愛協や民児協・PTAがアンケートに答えているので、図-7によるとやはり「子育て」や「青少年育成」に関する指摘も12~13%を占め、自治会や老人会より多い。また、図-8の各分野の課題項目の平均指摘数では、「青少年育成」分野が最も多いことも特徴である。分野別指摘数の割合と分野別平均指摘数のそれぞれで、上位3分野を抽出したのが表-7である。これによると、指摘数の割合と平均指摘数の双方で抽出された重要課題分野が、「青少年支援」、「高齢者支援」、「地域防災」の3分野となった。

表-7 青愛協・民児協・PTA・社協の重要課題の分野

分野別指摘数の割合	分野別平均指摘数
高齢者支援、地域防災、青少年育成	青少年育成、高齢者支援、地域防災

表-8 青愛協・民児協・PTA・社協のグループでの分野別。区域別の指摘数・注目項目と記述内容

A:子育て	B:青少年育成	C:高齢者支援
注目項目＝幼稚園、保育所、学童保育 記述内容： ・校区内の公立幼稚園が無くなり、跡地利用が希望に沿わず。遠くまで通園の要あり。現在子どもが徐々に増えているので、今後が気になる。 ・待機児童がいる。 ・4年生以上の学童保育と施設の充実 ・育児や発達相談が気軽にできる人が少ない。 ・幼稚園・学校に入る前までの遊び場所。	注目項目＝学習支援、スポーツ等活動支援 記述内容： ・中一ギャップ等に繋がらない支援。 ・未塾児童の低学力。放課後教室を充実 ・放課後の校庭開放を望むが指導者不足。 ・スポーツで丈夫な身体づくりと基本マナーの習得。 ・就学後の子どもの居場所が不十分 ・共働きが多く子どもの日常が把握困難 ・近くに店舗が多く子どもだけで行き易い	注目項目＝認知症予防、介護支援、移動支援 記述内容： ・地域の社会福祉事業団が力を入れるが、届かないところがある。 ・支援者（民生委員等）が高齢、人員不足。 ・認知症らしき人を関係機関に繋げない ・高齢者支援は一番の課題 ・介護支援を嫌がる人が居る。 ・低所得者の移動支援が不明確。 ・足が悪くなると外出しづらくなる ・無料で相談できるところが少ない。
D:住民の健康	E:地域の防犯	F:地域防災
注目項目＝健康相談、栄養相談、運動相談 記述内容： ・地域で相談できるところが、医者以外に無い。 ・家から出にくい人の運動の案内を見ない ・高齢者に少しでも身体を動かしてほしい。 ・地域のいきいき体操を紹介。 ・高齢になると好きなものしか食べなくなる。 ・薬局に行かない人が薬の相談ができない。	注目項目＝不審者対策 記述内容： ・死角になる場所が多い ・小さい子供が多く、犯罪発生率も高い（小松小 PTA）。 ・オレオレ詐欺の電話がよくある。 ・青愛協の見守り活動の場で情報発信。 ・警察からのチラシ（犯罪情報）を掲示。 ・空き家がある。	注目項目＝避難警報、避難経路、防災備え 記述内容： ・防災訓練のアナウンスや警報が聞こえない。 ・警報の地域全体周知が大変。経路・手段の学習を周知させるのが困難。 ・住民の無関心、認識不足。 ・マンションは個人所有なので避難しづらい。 ・避難施設はいくつかあるが家を離れがたい。 ・防災の備えが重く運搬が大変。
G:学び直し・知識増進	H:コミュニティ活動	I:商業活動
注目項目＝再就職等専門知識 記述内容： ・専門知識に関する講座の広報がほぼない。 ・高齢になると再就職先が限られてくる。 ・数か月のお試しが可能な、賃料の安い空き店舗がない。	注目項目＝子ども会、自治会 記述内容： ・昔の様に子ども会が復活してほしい。 ・子ども会は次世代の育成に大事だが減少。 ・中高生が子供会にも婦人会にも入れず。 ・少子化で子ども会に入る人が少ない。 ・自治会参加者が限定的。 ・自治会は地域の中心で情報伝達を担うが、未加入者が課題。	注目項目＝来店者増減、空店舗増加、同左利用 記述内容： ・大規模店に人が集まる。 ・現役世代の人口が減少。 ・同業種店舗が近くで競合している様だ。 ・空店舗を貸スペース/オープンスペース等で一時的でも使えるようになると良いと思う。 ・使える空き店舗の情報が無い。 ・高齢になって店じまいする人が多い。

当グループの回答数が 11 票しかなく、課題項目の指摘数は最大でも 5 票しかない。しかし、4 票で指摘が 36%、5 票で 45%あるので、4～5 票ある指摘項目は、重要と認識していると判断し表-8 で注目項目とした。同表からは、当グループの重要課題分野及び注目項目とその内容が明らかになった。以下にその重要課題分野の概要を述べる。

青少年育成：「学習支援」と「スポーツ等活動支援」が重点項目である。「学習支援」では未塾児童の学力支援や放課後教室が課題で、「スポーツ等活動支援」では、活動場所と指導者の不足が課題として挙げられている。

高齢者支援：「認知症予防」、「介護支援」、「移動支援」が重点項目である。「認知症予防」では、「認知症らしい人を関係機関に繋げない」、「介護支援」では「支援を嫌がる人の存在」、「移動支援」では「低所得者の支援が不明確」、等が課題とされた。

地域防災：「避難警報」、「避難経路」、「防災備え」が重点項目である。「避難警報」では警報が屋内では聞こえない点、「避難経路」では住民の無関心や認識不足、「防災備え」では備えが重すぎて運搬が大変、等の問題が挙げられている。

重要課題分野以外では、「幼稚園」、「健康相談」、「不審者対策」、「再就職等専門知識」、「子ども会」も重点項目となっている。

7. 鳴尾浜連絡会

鳴尾浜連絡会は企業団地の中の企業団体であり、鳴尾浜には居住者は居ない。従って、居住者の生活に関わる課題は無いが、通勤、就労や災害時の避難等に関する課題は出てくる。アンケートの回答は以下のとおりである。

地域防災：「毎年 10 月に鳴尾浜産業団地内で、津波避難訓練を 6 年連続で実施しているが、参加者が毎年同じ。」 即ち、訓練が同地の従業員に広がらない点を課題としている。

その他（通勤）：「通勤手段としてバスの運行が少なく、又時間遅れのため、利用者が少ないように思われる。阪神武庫川団地駅を起点とした鳴尾浜巡回バスの運行があれば、バス利用の可能性が大きくなると思う。」 即ち、通勤の利便性が高くない点を課題としている。

8. 課題の一つ「空家問題」の解決案について

自治会の課題指摘が多い「防犯」分野でも、特に空家問題は課題意識が高かった（図-9 参照）。

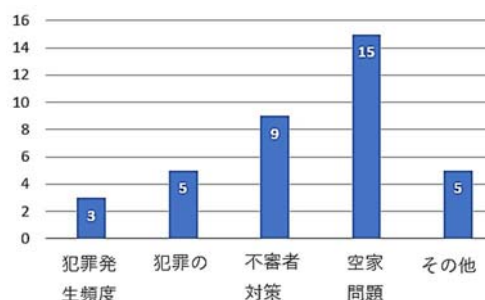


図-9 自治会における防犯の課題項目認識数

そこで、この「空家問題」を例にとり、空き家を活用できるようにすると、他の課題の解決にもつながるであろう点に関して以下に考察をする。

8-1. 鳴尾地区での空き家の様子

西宮市が H28 年に実施した「空き家実態調査」によると、鳴尾地区平均では市内で必ずしも空家が多い方ではないが、分布では部分的に集積している場所があることが判る（図-10,11 参照）。

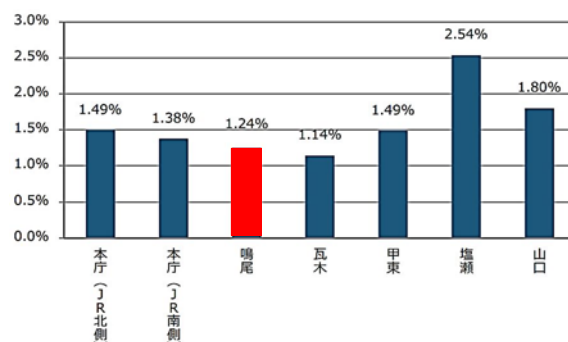


図-10 西宮市の地区別空き家率



図-11 鳴尾地区の空き家の密度と分布

また、「空家」と言っても多様で、管理されているもの（図-12）から、放棄されたもの（図-13）まであり、状態の良いものは十分に使用に耐える様に見える。



図-12 管理されている空家（鳴尾1丁目）



図-13 前庭がゴミ捨て場の放棄された空家（北鳴尾町）

このような空き家に対し、地域の人たちがどのような意見を持っているかをアンケートから見ると、

- ・空き家が増加しつつあり、行政がもっと前面に出て対策をする必要あり。
- ・死亡後の空き家（後継者が住まない）が多く、高齢者の多い町内で防犯上も含め問題。
- ・老朽化した空家が放置され、景観と防犯上の課題があり、近隣迷惑。
- ・空家が多く所有者不在で修理等の連絡不能、問題発生時の連絡方法。
- ・自然災害の家屋被害を持ち主が放置、台風時の心配
- ・地域での空き家利用

等の意見がある。

8-2. 空き家の利活用による課題解決

ここで、上述の意見の一つにもあるように、地域での空き家の利活用を以下に考えてみる。まず、利用するための流れとしては、図-14 の様なフローチャートが考えられる。

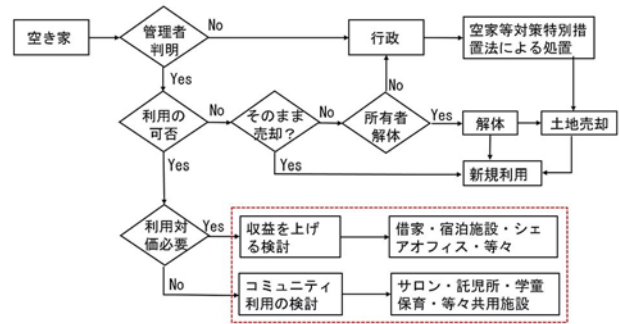


図-14 空き家の処理に関する概略フローチャート

図-14 の赤枠で示した部分が空家の利活用に当たるが、前述の課題として自治会や老人会から指摘されている項目で、空家を利用することで対応できそうな重要な課題としては、以下の様な項目を挙げることができる。

子育て分野：保育園、学童保育、育児・発達相談

高齢者支援分野：認知症予防

住民の健康分野：健康相談

学び直し・知識増進分野：教養・文化

これらの課題を、空家を利用して解決する方策としては以下の様なことが考えられる。

子育て：空家を活用して託児所や子供の居場所を開設することができる。鳴尾地区には 65 歳以上の人が 2.5 万人も居るので、その中にリタイアしたがまだ元気な保育士や教員が居るはずで、その人たちが若干の費用をとって水光熱費に充てつつ、ボランティア的に子どもの面倒を見ることは可能だと考える。

高齢者支援：認知症予防は切実な課題である。空家を利用できれば、高齢者が寄りやすい自宅に近い場所で、認知症予防のための勉強会や栄養指導、あるいは「コグニサイズ」という予防運動を行うことができる。コグニサイズに関しては、国立長寿医療研究センターの 2 日間の研修を受ければ指導ができるので、元気なシニアが指導をすることも可能である。

住民の健康：「健康相談」の要望が多く、自宅近くで気軽に相談に乗ってもらえる機会が欲しいという要望も多々ある。空家を活用して、退職した医師・看護師や薬剤師等が、高齢者の住まいの近くで相談に応じることができる。

学び直し・知識増進：遠くに出かけずに、教養・文化を吸収する機会が欲しいという要望が多い。当地区の 65 歳以上の 2.5 万人の中には、退職した元気な教員や文化人等が居ると考えられる。その人たちが空き家を活用して、高齢者の住まいの近くでサロン風に教養講座を開催することは不可能ではない。

この様に空家の利活用によって、課題として指摘されていた事項のいくつかを、空家の解消と同時に解決することは不可能ではない。但し、空家を利活用して何がしかの活動をしようとする、最低限、水光熱費や維持管理費、あるいは家の借入費が必要になる。その費用については、やはり活動に参加する受益者が負担するのが筋であろう。従って、これらの空家の利活用に関わる費用の徴収や支払いを含む維持管理をするための管理運営組織があることが望ましい。

9. 結論

本調査研究の結果、各団体の 4 区域に関し、夫々が重要と認識する課題の概要が明らかになった。各団体・区域の重要課題分野を表-9 にまとめる。しかし、同一の重要課題分野であっても、団体・区域により、その重点項目が異なることも明らかになった。また、重点課題分野以外でも、表-10、-11 で薄墨をかけた重点項目も、当該団体・当該区域にとっては大きな課題であるとして指摘がなされていると判断できる。

表-9 団体別・区域別の重要課題分野

団体・区域 課題分野	自治会				老人会				青愛協・民児協・PTA・社協
	北東	北西	南東	南西	北東	北西	南東	南西	
子育て	○			○					
青少年支援									○
高齢者支援		○			○	○	○	○	○
住民の健康						○	○		
地域の防犯	○	○	○						
地域防災		○	○	○		○	○	○	○
学び直し・知識増進									
コミュニティ活動	○		○	○	○		○	○	
商業活動									

本調査・研究では、あくまで地域課題の概要が判ったのであり、これらの課題に関して、更に詳細にその内容を調べる必要がある、今後の調査に期待したい。一方、重要とされなかった課題も、当該課題に直面している人たち個々人にとっては大きな問題でもあるので、丹念にその内容を解きほぐす必要もある。

例えば、鳴尾浜連絡会から指摘された通勤の点は、住民団体からは「免許証返納に伴う移動手段の確保」の課題として挙げられたことを含め、地域の交通体系の課題として検討が必要になる。

一方で、空家の利活用が可能で、同時に様々な指導や相談に応じる元気シニアやボランティアが居れば、指摘された課題のいくつかは解決に向かうと推察される。

参考文献

西宮市、西宮市空き家等対策計画、西宮市空き家等対策室、H29 年 7 月

図版出典

図-1～9,14：筆者作成

図-10：西宮市空き家対策計画、平成 29 年 7 月の図を元に筆者作成

図-11：西宮市空き家対策計画、平成 29 年 7 月

図-12,13：筆者撮影

謝辞

アンケート調査票の配布では鳴尾連合自治会事務局（西宮市鳴尾支所）の方々、そしてアンケートの回答でご協力いただいた地域団体の皆様に、この場を借りて謝意を表します。

表-11 老人会の集計結果（各項目の指摘を「1」で示す。薄墨は当該分野で3割以上の数の指摘を受けた項目を示す。）

区域	課題分野 課題項目 団体・委員名	子育て				青少年育成				高齢者支援				住民の健康				地域の防犯				地域防災						学び直し・知識増進				コミュニティ活動				商業活動等												
		①乳幼児	②幼稚園	③保育所	④学童保育	⑤相談・発達	⑥その他	①学習支援	②非行対策	③活動支援	④スポーツ	⑤その他	①認知症予防	②介護相談	③介護支援	④生活支援	⑤移動支援	⑥その他	①健康相談	②栄養相談	③服薬相談	④運動相談	⑤その他	①犯罪発生頻度	②犯罪の程度	③不審者対策	④空き家問題	⑤その他	①避難警報	②避難経路	③避難手段	④避難施設	⑤防災備え	⑥その他	①自治会	②子ども会	③婦人会	④老人会	⑤その他	増①店舗等の増加	活②空き店舗の活用	減③来店者の増	後④継承者問題	⑤その他				
北東	小松校区老人会																																															
	小松老人クラブ	1																																														
	小松老人会																																															
	老人クラブ解散																																															
	小松東第一老人クラブ																																															
	小松老人クラブ-1	1																																														
	小松老人クラブ-2																																															
	小松西町老人クラブ																																															
	第二和慶会																																															
	北東小計	81	0	3	4	0	0	1	1	2	3	0	6	3	2	2	0	0	7	0	0	3	0	4	0	4	2	0	2	0	4	0	3	2	0	1	0	5	0	6	0	0	8	0	1	2	0	
北西	甲子園三番町福寿会																																															
	里中第一親交クラブ	1																																														
	鳴尾北校区老人会																																															
	甲子園二番長福寿会	1																																														
	甲子園六番町たけのぼし会																																															
	鳴尾北老人会																																															
	鳴尾北校区老人会																																															
	甲子園一番町あひる会	1																																														
	鳴尾北学区学友健助明友会	1																																														
	甲子園四番町長生会	1	1																																													
北西小計	89	2	2	1	2	0	1	2	4	2	3	1	4	2	2	1	3	3	2	1	1	1	2	6	2	0	1	4	3	4	1	0	3	0	2	0	7	2	1	0	1	2	0	1	2	0		
南東	安屋町老人クラブ																																															
	親和クラブ	1	1																																													
	高須校区老スークラブ運営会																																															
	安屋老人クラブ	1																																														
	上田老人クラブ	1																																														
	グリーンクラブ10																																															
	上田（中町）老人クラブ																																															

ウォーカビリティから見たオールドニュータウンの 将来シナリオに関する試案

- 北大阪都市計画区域の茨木市におけるスマートデクラインに向けて -

加登 遼

武庫川女子大学 生活美学研究所

全国のオールドニュータウンは、急速な高齢化を伴う人口減少が問題となっている。そこで、自動運転、空き家活用、近居支援など、様々な取り組みが全国各地で展開される中、本研究は、ウォーカビリティの観点からオールドニュータウンの将来シナリオを試案する。

キーワード：オールドニュータウン、ウォーカビリティ、将来シナリオ

1. 序論

本論文の目的は、オールドニュータウンの将来シナリオについて、ウォーカビリティの観点から試論することにある。その背景には、オールドニュータウン（以下、“オールドNT”と省略）での急速な高齢化がある。このオールドNTとは、高度経済成長期、大都市圏周辺地域で大規模に開発された郊外住宅地である（Fig.1）。その大半は高齢化率30%を超えており、居住者の健康で自立的な生活環境の維持が課題とされている。そこで、オールドNTは、スマートデクラインを目指す必要があるのではないだろうか（加登ら, 2020）。

2. オールドNTの立地

第2章は、オールドNTの立地を解明する。その手法として、加登ら(2017)を参照して、H22年度国勢調査データを用いて、北大阪都市計画区域を対象に、因子生態分析を行った。その結果、13のクラスターを抽出して、地理情報システムにより描画した（Fig.2）。その結果、オールドNTは、Fig.2における赤色のクラスターであることが分かった。

3. 大都市圏周辺地域の将来シナリオ



Fig.1 オールドNT（写真は茨木市山手台）

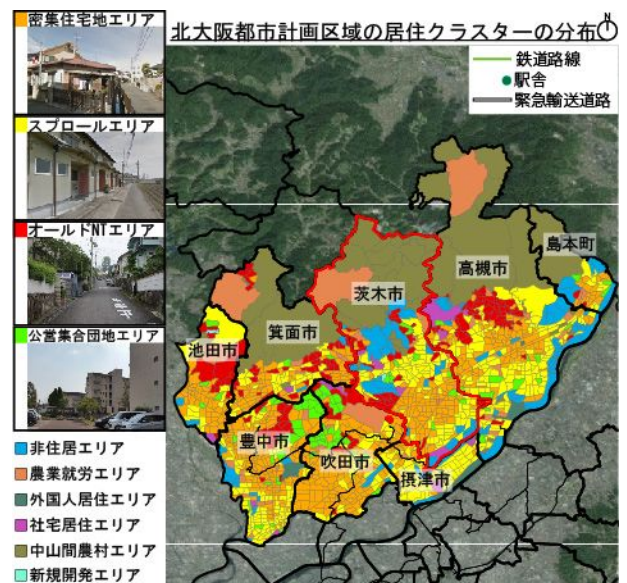


Fig.2 因子生態分析によるオールドNTの立地
（出典：加登ら, 2017 を一部修正）



Fig.3 大都市圏周辺地域のシナリオ・マトリクス
（出典：加登ら, 2020 を一部修正）

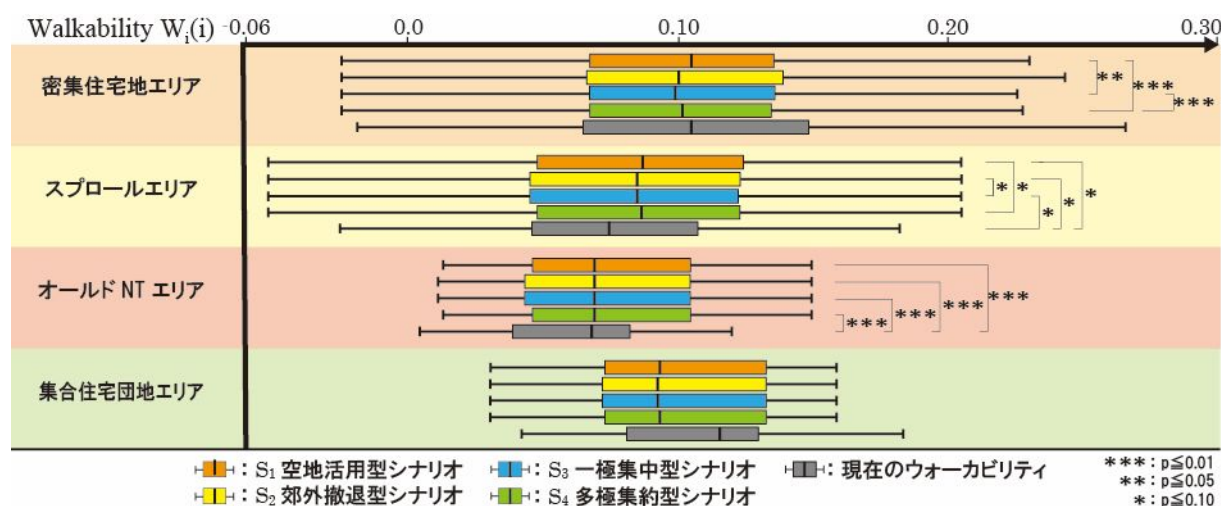


Fig.4 各クラスターにおけるシナリオ別ウォーカビリティ(出典:加登ら,2020 を一部修正)

第3章は、オールドNTを含む大都市圏周辺地域の将来シナリオを解明する。その手法として、加登ら(2020)を参照して、シナリオ・プランニングを行った。具体的には、20年後のシナリオを描くことを目的に、大阪府茨木市の行政職員に対して、ドライビングフォースに関する半構造化インタビューを実施した。その結果、「土地利用の多様性」と「都市施設の立地」の二軸を抽出して、パフォーマンス・インパクト・マトリクスを描いた(Fig.3)。その結果、空地活用型/ 郊外撤退型/ 一極集中型/ 多極集約型シナリオを抽出した。

本研究の結論は、オールドNTが、ウォーカビリティの観点から取り組んだ方が良いことを解明した点である。しかし、具体的に有効となるシナリオは解明できなかった。それを踏まえて、現在、大阪府茨木市山手台を事例として、トランスフォーマティブ・シナリオ・プランニングにより、居住者・自治体などと連携して、実践的に将来シナリオを研究している。それにより、オールドNTの居住者に共感を得て、実現しやすい将来シナリオを解明することが期待される。

参考文献

4. 将来シナリオのウォーカビリティ評価

第4章は、Fig.3の将来シナリオに対するウォーカビリティ評価を行う。なお、加登ら(2019)は、ウォーカビリティを「日常生活において、居住エリアのイメージを向上するデザインにより、歩行を促進する生活環境」と定義している。その手法として、加登ら(2020)を参照して、H.Kato et al.(2020)が開発したウォーカビリティ指標を用いて、各居住クラスターにおけるシナリオ別ウォーカビリティを算出して、箱ひげ図を描画した(Fig.4)。その結果、スプロールエリアは、コンパクトシティシナリオのオルタナティブとして、空地活用型シナリオの有効性を評価した。一方、オールドNTは、ウォーカビリティの観点から取り組んだ方が良いことが分かった。しかし、具体的に有効なシナリオは解明できなかった。

5. 結論と今後の課題：オールドNTにおけるトランスフォーマティブ・シナリオ・プランニング

- 1) 加登遼、神吉紀世子「居住エリアのウォーカビリティに立脚した地域評価に関する指標の開発と検証-北大阪都市計画区域の茨木市におけるスマートシュリンキングに向けて-」, 都市計画論文集, Vol.52, No.3, pp.1006-1013, 2017.10
- 2) 加登遼、神吉紀世子「スプロール市街地における主観的街路評価からみたウォーカビリティ指標の有効性- 北大阪都市計画区域のスプロール市街地におけるスマートシュリンキングに向けて -」, 都市計画論文集, Vol. 54, No. 1, pp.10-14, 2019.4
- 3) 加登遼、神吉紀世子「シナリオ・プランニングに基づくスプロールエリアの将来シナリオに対するウォーカビリティ評価-北大阪都市計画区域における茨木市を事例としたスマートデクラインに向けて-」, 日本建築学会計画系論文集, Vol.85, No.767, pp.101-111, 2020.1
- 4) Haruka KATO, Kiyoko KANKI: "Development of Walkability Indicator for visualizing Smart Shrinking - A Case study of Sprawl Areas in North Osaka Metropolitan Region-", International Review for Spatial Planning and Sustainable Development, Vol.8, Issue 1, pp.39-58, 2020.1

線状開発地・甲子園の生活道路 — 歩行者から見た自然と歴史的景観の調査 —

黒田 智子

武庫川女子大学 生活環境学部 生活環境学科

生活美学研究所で筆者が研究員としてヘッドを務める「甲子プロジェクト」では、専門家、地域住民、本学の学生らとの協働で、甲子園ホテル（現・甲子園会館）と敷地条件を含む周辺地域との関係を読み解いている。それを通じて、周辺地域の歴史的・文化的特徴を見出し、その結果を地域住民と共有することにより社会貢献を目指している。

兵庫県建築士会の地域貢献活動助成を受け、3年間で実施する本計画は、特に学生参加に重点を置き、ゼミ活動の一環として、生活環境学科における筆者の研究室（空間デザイン論研究室）に活動の核を置く。甲子園開発地の自然及び歴史的景観要素とその背景を歩行者の視点から調査し、地域の魅力を発見したい。その成果が、地域に認識され、まちづくりのイベント等に活用されるように、「まちづくりマップ」としてまとめる計画である。今年度は、まち歩きの実施と、水源・土地所有についての調査をおこなった。

キーワード：甲子園開発地、甲子園ホテル、水源、土地所有、まち歩き

1. はじめに

甲子園ホテルは、歴史的遺産として地域のシンボリックな存在であるが、建築と周辺地域との関係についてはあまり認知されていない。同ホテルは、阪神電鉄により甲子園開発地内に建設され、その敷地選定は開発地計画に大きな意味があったはずである。また、開発地は廃川敷上に計画された線状の土地にある。周辺地域との間に通常の面的開発による土地とは違った影響関係があったと考えられる。兵庫県建築士会の助成を受けた本事業では、甲子園開発地および周辺地域を歩行者の視点から調査し、景観と歩きやすさについての特徴を明らかにする。ひとつには、甲子園ホテルを巡る研究—建築家・遠藤新がその師・フランク・ロイド・ライトから学んだ敷地を読み解く設計手法を検証する一助とする。さらに、周辺地域、特に甲子園開発地が持つ歴史や先見性を、ホテル建築との関係から調査分析し、地域社会に情報提供することで景観への意識を高め、歴史的景観の保全へと繋げたい。そのために、本研究では、景観形成の背景・要因を重視する。

2. 線状都市の1930年と現在の比較

甲子園開発地とその周辺地域を繋ぐ生活道路の状況を、開発当時の周辺地域の地図（1923年の測量を基盤とする）と宅地分譲計画図（阪神電鉄、1930）を重ねて考察する。線状都市は、周囲に接する表面積が大きいので、影響を受けやすいと考えられる箇所を抽出する。甲子園ホテルは、武庫川と枝川の分岐点、甲子園球場は、枝川と申川の分岐点にあることから、ランドマークとしての電鉄側の意図が推察される。また、申川の開発が枝川よりも遅れたのは、今津村の集落が申川に隣接しているため、制限を受けたことが要因であろう。

さらに、現在の地図に前述の電鉄による開発計画図を重ねたものを作成し、それをもとに、現在の道路の状況や景観構成要素（水路、松林、街路樹、建築、住宅、石碑等）を調査する。

以上の結果から、開発地に現在顕在あるいは潜在する魅力と問題点の整理を行う。同時に、当初甲子園ホテルの建設が計画されていた海岸と、現在のホテルの敷地条件とを比較（共通点と相違点）し、常務取締役兼支配人・林愛作が行ったとされ

るホテルの敷地選定の意図を考察する。

2. まち歩き—生活道路から見た景観

2.1. 調査の範囲と視点

今年度のまち歩きは、黒田研究室所属の3年生と、7月、8月に合計5回実施した。調査したのは、武庫川と枝川の分岐点から、国道2号線までの範囲で、比較的大きな土地区画で分譲された住宅地エリアである。自然に関しては、樹木と水に着目し、①目立つ樹木は、松に限らず地図に記入する。同様に、②水を感じる場所、③歴史を感じる建築・構造物の場所と特徴を記入する。

2.2. 調査の結果と考察

2.2.1. 生活道路から見える緑

概ね、阪神電鉄が開発した当時の敷地割に依る生活道路が残されていることが確認できた。もともと小さな敷地割の場所と、後に分割して分譲住宅となっている場所とがある。当時のままの敷地割の住宅地は、概ね規模が大きく（100～300坪）、庭の樹木も茂り、生活道路に緑を提供している。洋風の住宅の中でも、門扉の上に「見越しの松」を思わせる松を植樹しているものがある。また、道路脇にも松が植わっていることが確認された。

甲子園ホテル周辺および、武庫川堤防周辺は、松を含む樹木が多い。それらに接した道路を歩く時だけでなく、それらに向かって歩く時や、通りを2、3本隔てたところで道路を横断する際にも、視線の突き当りの緑として見通され、「緑が多いところにいる」と意識される。

その他、開発地内外に小公園が2箇所あり、やはり地域に緑を提供している。

2.2.2. 生活道路から見える水路

武庫川と枝川の分岐点には、1923年、武庫川から枝川に流れる水を締切って鳴尾村の水路にのみ灌漑用水を流す枝川樋門がある。それに繋がる水路には、現在も水が流れている。周辺には松が多く育成し、水と松による景観をつくり出している。並行して、武庫川堤防添いには、桜並木がある。水と緑が多い印象であるが、緑が茂りすぎて見通しが悪く、下草の手入れがなされていない。それが全体の土地の低さと相まって、親しみにくい雰囲気となっている。

国道2号線から北側（甲子園ホテル側）を眺めると、保育園とともに、浄水場が垣間見える。道路側から見下ろせるが、かつてあった大湯池を思わせるような水の痕跡は見当たらない。

枝川の西岸にあたる生活道路には、新堀川という水路が流れている。水路沿いの住宅地は、敷地面積も大きく、塀のデザインにも気を配っている。高めの石垣が続き、それらの高さは、2～3mにも及ぶ場合がある。枝川が天井川だった頃の名残と考えられる。生活道路は車道を兼ねるが、街路樹、水路、高い石垣、住宅地の塀・庭の緑・屋根などが、良質な景観を形成している。

2.2.3. 生活道路から見える文化財

かつて、ランドマークとして遠望され、迎賓館ホテルを特徴づけていた甲子園会館の2本の塔は、まち歩きをしたエリアにおいては、視界に入らない場所が多いことが確認できた。

甲子園ホテルほどの規模ではないが、ホテル開業の2年前に完成していた・新田長次郎邸（木子七郎、1928、現・松山大学温山記念館）もまた、塀、屋根、窓などによって、広い庭園の樹木の緑と共に良質な景観を、生活道路に提供している。文化財として見学をおこない、庭園が地域の水の流れを活かした設計であることを確認できた。

2つの文化財は、マンションや宅地分譲によって変貌するエリアに、緑だけでなく、歴史的な趣を提供している。甲子園会館のボーダータイルを模したタイル、温山記念館のスペイン瓦、両者が持つ寄棟屋根などは、まち歩きのエリアを含む周辺地域にみられ、意図的に模した可能性が示唆され、景観形成の要因として捉えることができる。

2.2.4. 景観調査からの考察

まち歩きを実施したエリアは、当時ほどではないであろうが、比較的松林が良く残っており、楠や桜など、他の樹木と共に、緑豊かな景観をつくっている。開発当時は、枝川兩岸の松林として甲子園球場、さらに鳴尾浜まで伸びていた。このような緑の「線」としての連続は、武庫川の河岸を囲む堤防、現・甲子園会館敷地内に見られるのみで、失われつつある。公園や庭木など、「点」としての緑がそれに代わるものである。

一方、水路に関してみると、良好な景観を形成

する新堀川の水源は、甲子園開発地や枝川河川敷には無く、枝川以北の旧瓦林村にあることが分かった。一方、甲子園開発地の上水と旧鳴尾村の灌漑用水を提供してきた現在の鳴尾浄水場は、水の姿・表情を景観としてほとんど提供していない。

もしも、水源地から鳴尾浜へ続く水と緑の線的關係が地域景観として意識されれば、自然環境への意識育成の一助となるのではないかと考える。

3. 役割・所有者に着目した景観の変遷

3.1. 水源地について

これまでの研究から、甲子園ホテルが完成した昭和5（1930）年、ホテルの南側にあった大湯池からは、ポンプで水を汲みあげて灌漑用水の不足に対応したことが新聞記事から確認されている。近代的なポンプという方法で、必要な水量を確保したのである。また、甲子園ホテルの東側には、甲子園開発地の上水道の水源確保のための施設が建設されていたことが分かっている。これらの位置を考え合わせると、現在の鳴尾浄水場は、もともと、別の役割を持つ2つの水源が、1つになったものであることが分かる。

さらに所有という観点から見ると、大湯池に設置された水源地は鳴尾村、甲子園開発地の水源地は、阪神電鉄に帰属していたと考えられる。特に、鳴尾村は、かつて、武庫川の洪水による水害と、干ばつによる水不足に苦しんだ歴史をもつ。兵庫県が、枝川を買収し、その収益で武庫川の改修工事に着手した理由でもある。異なる機能を持つ2つの水源地は、それぞれポンプで湧水を汲み上げる点が共通している。また、甲子園開発地は、何処を掘っても良質な井戸が湧き出ることを、分譲案内パンフレットに謳っている。枝川の下には、良質な湧水が流れていた証と考えられる。

現在、2つの水源地は、鳴尾浄水場として1つになり、西宮市水道局が管理・運営している。このことは、今日の景観の変化と深い関わりがあることが推察される。水源は、命の源でもあるがゆえに非常に重要であることは、いつの時代も変わらない。一方、今日の景観の変化には、所有者の変化が影響している可能性がある。

そこで、上木戸咲月（黒田研究室4年生）さんは、

卒業研究のテーマとして、これら2つの水源地の変遷の調査に取り組んだ。その成果は、2019年度卒業研究「甲子園開発地と鳴尾村における水の流れ―旧枝川の起点にある2つの水源に着目して―」としてまとめられている。

3.2. ホテルの敷地について

2つの水源地は、甲子園ホテルに近接している。地域住民だけでなく、ホテル常務取締役兼支配人・林愛作や建築家・遠藤新にも、水源地の役割は、命の源として強く意識されたと推察される。鳴尾村の灌漑用水のための水源地は大湯池内にあった。埋め立てにより消滅した大湯池は、当時ホテルの南側にあってホテルの景観を補完し、来訪者の舟遊びに用いられていた事実が注目される。

さらに、甲子園ホテルの敷地は、枝川廃川敷の土地に鳴尾村から買収した土地を一部加えたものであった。以上の事実を考え合わせ、神戸地方法務局に置いて土地所有変遷の調査に着手した。

4. 結び

地域住民の景観への関心の喚起には、持続可能な方法の提示が欠かせない。湧水を含め、現在、目に触れる場面が少ない甲子園開発地の水の流れと、松をはじめとする樹木との関係について、本研究の成果として地域に還元したいと考えている。その場合、様々な世代とのコミュニケーションによることが不可欠ではないかと思う。まち歩きマップ作成と並行して、効果的なワークショップを工夫したいと考えている。

本研究は、兵庫県建築士会理事・杉本雅子氏（本学非常勤講師）の助言・協力によって実現した。ここに、深く感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 黒田智子：甲子園ホテルの企画・設計理念の背景 その2 ―「利他」を視点とした同時代の計画案との比較から―、甲子プロジェクト報告集第2号、武庫川女子大学、61-114、2017。
- 2) 地域計画建築研究所：西宮市水道70年史、西宮市水道局、291-305、306、392-395、432、1994。
- 3) 西宮市水道技術会編集委員会、西宮環境デザイン会議：みず未来にしのみや―西の都を水の都に一、西宮市水道技術会編集委員会、1994

産学連携によるグローバル人材の育成

～国際業務力からの実践的な英語教育の接合～

武庫川女子大学 文学部 英語文化学科

三宅弘晃 三浦秀松 山田慎人 宇佐美彰規 辻和成

本研究では、産学連携を通じ、地元企業の英語事情を汲んだグローバル人材育成を目指す。すでに本学科で行われてきた就職セミナー、サービスラーニング、企業研修といった「キャリア教育」への取り組みを有機的に接合するため、学生のキャリアに関する学修成果をeポートフォリオに組織化し、エンプロイアビリティを設計する。

キーワード：キャリアセミナー、サービスラーニング、ビジネス英語、eポートフォリオ

1. 研究の背景と目的

グローバル化が進展する中、『中小企業海外事業活動実態調査報告書』（2017）によると、従来海外進出を主導していた機械・電気製品や金属製品などの業種以外に、食品関連業種の中小企業の海外展開が伸びていることが確認された。

武庫川女子大が位置する西宮市は食品産業が盛んであり、例えば日本を代表する酒どころの灘五郷（今津郷、西宮郷、魚崎郷、御影郷、西郷）が西宮市と神戸市の東灘区・灘区を合わせた阪神間に広がっている。財務省貿易統計によると、近年日本の清酒の海外輸出の海外輸出も顕著に伸びていることが分かる。

また一方で、企業活動のグローバル化が進展した結果、職場での国際業務が拡大しており、大企業のみならず中小企業においても英語を使用する機会が増えている(辻, 2017)。このような状況下、西宮市を中心とした神戸阪神地域のものづくりに携わる企業においても英語を使う場面や頻度が増えていることが推察できる。また同様に、これらの企業では実用的な英語力を備えたグローバル人材育成の必要性がさらに高まることは察するに余りある。

このような時代の変化を背景に、武庫川女子大学の英語文化学科（大英）と短期大学部の英語キャリア・コミュニケーション学科（短英）では、グローバルな英語教育と人材育成を実践しており、その蓄積された専門的知識（技術）を地元産業の育成に繋げたいと考えている。具体には、地元で海外展開を推進するものづくり企業との連携により、実践的な英語力を備えたグローバル人材育成の促進を図りたい。

2. 研究方法

本学科（大英と短英）では、学科独自のeポートフォリオ（カードシステム）を構築している。同システムには、学生の英語4技能での学修成果、TOEIC、TOEFLや学科独自の文法テストの資格試験結果等の履歴が蓄積されている。今後は、以下プロジェクト（就職セミナー、企業研修、サービスラーニング）を含む国内外における各種の「学び」をeポートフォリオに組織化し、個々学生のエンプロイアビリティの構築を目指す。

大英と短英の学生を対象に平成23（2011）年より、実社会で活躍している卒業生、企業から内定を得た学生あるいは企業の人事担当者等を招き、

年6回程度で90分の就職セミナーを開催している。これらはビデオで収録しアーカイブとして保存し、本学のLLライブラリーにて視聴することができる。

また、短英では学科主導の企業研修を平成22(2010)年に立ち上げた。学生は入学直後より「初期演習」等にて業界・企業研究を行うと共に外部講師によるキャリアデザインセミナーを受講しビジネスマナーを学ぶ。そして、1年次8月に15名ほどのグループに分かれ協力企業(6社ほど)にて研修を受ける。平成23(2011)年には1年次秋学期のアメリカ分校(MFWI)留学中に米国での企業研修を開始した。学生はMFWIにてキャリア科目を受講し企業研修を受ける。また、大英2年次生と3年次生を対象とし秋学期実施のエクステンションプログラムでは、MFWIにて平成28(2016)年より「グローバルキャリア・プロジェクト」を行っており、大英学生のキャリア教育に力を入れている。

さらに、大英では地元企業と連携し「サービスマーケティング」を実施する計画を立てている。これは奉仕活動(サービス)と学習活動(ラーニング)の実践を統合させた学習方法であり、学生が身に付けた英語力を活かし社会貢献活動を行う機会としたい。対象はTOEICで700点をクリアした本学科の学生とし、実施期間はMFWI春学期留学後の2年次6月以降から3年次が終了する間とする予定である。事前事後研修を含め、約30時間のプロジェクトとすることを想定しており、ボランティア活動として1単位認可される活動とする計画である。

本稿では、このような本学科の取り組みの一端を紹介し、eポートフォリオを通じたエンプロイアビリティの設計について考察する。

3. 本学科の取り組み ① eポートフォリオによるエンプロイアビリティの構築

清田(2017)は、従来の英語教育を「閉ざされ

た英語学習」と指摘し、これからは、自立した個人として世界と向き合うための学びが必要と主張している。これまでの「教える側」からの枠組みだけでなく、「学ぶ側」の視点を大いに取り入れる必要があり、その際に、教師と生徒・学生をつなぐ「仕掛け」として、また、教師同士をつなぐ「仕掛け」としてポートフォリオの重要性について述べている。大英および短英では、10年以上前からポートフォリオに着目し、学科独自に整備を進めてきた。この節ではその概要について述べる。

3.1. 沿革・目的・目標

本システムは、平成18(2006)年頃から学科内で着想され、平成20(2008)年度から予算を計上し計画が動き始めた。最初のシステムの運用は平成22(2010)年度から始まった。平成27(2015)年度に新しいシステムに移行し、現在に至るまで改善を続けている。以下のシステムの目的に記述したように、英語力の診断結果を保管する場所(カルテ)というシステム開発当初の構想から、「カルテ」を英語読みした「カード」という愛称で呼ばれている。

本システム構築の目的は、大英と短英の学生に必要とされる高度な英語コミュニケーション能力を養うために、一斉指導と個別指導を組み合わせた教育を行うことである。まず、英語の学力を言語と文化の観点から見直すということが構想された。次に、グローバル社会で活躍するための英語コミュニケーション能力を養うために、各学生にどのような能力(学力)が必要か、何を今までに身に付け、何が不足しているかを見極める必要があるということを学科の共通認識とした。このように、カードは、個々の学生を大切にしながら、入学から卒業に至るまで個人指導も重視した英語教育を推進することを目的としている。

目標は、Web上に作成した学習カルテのデータに基づいた個別指導をすることによって、個々の学生に必要な効果的な指導をすることである。また、学生自身が自分の学力を時系列で見ることに

よって、これから英語力を向上させるためにはどのように学んだらよいかを積極的に考えるようになることも目標としている。これは自律学習につながり、特に伸び悩んでいる中級レベルの学生の指導効果の向上を目指している。

3.2. 方法・対象

Web 上にシステムを構築し運用している。現在のシステムは、バリエントソフト社（福岡）の「キャンパスマジック」というシステムをベースに、学科独自のテーラーメイドのシステムとなっている。学外アクセスも整備しており、学生は学内と学外のどちらからでもアクセス可能となっている。学外からアクセスする場合、大英と短英の学生のみ学院の「オンラインサービス」にカードログイン用のボタンが現れ、そこからログインできるように設定されている。

対象は大英と短英の全学生で、大英 1～4 年各学年 200 人、短英 1～2 年各学年 100 人の計 1,000 人

の在籍学生全員を対象にシステムの運用を行なっている。1 年の入学学年から卒業学年（大英は 4 年、短英は 2 年）まで、在籍中は毎年システムを使って次節で述べる各種学修成果の記録を行っている。

3.3. これまでの具体的な取り組み

本学関係者の中では周知の通り、学生が履修した科目の成績は本学全学科共通のオンラインシステムである MUSES で管理されている。カードでは、科目の成績には必ずしも反映されない以下のような各種学修成果を保存している（図 1 は TOEIC スコアの 4 年間の推移を表す画面のサンプルである）。

- 文法力診断テスト
- 語彙力診断テスト
- TOEIC・TOEFL スコア
- リスニング課題学習履歴

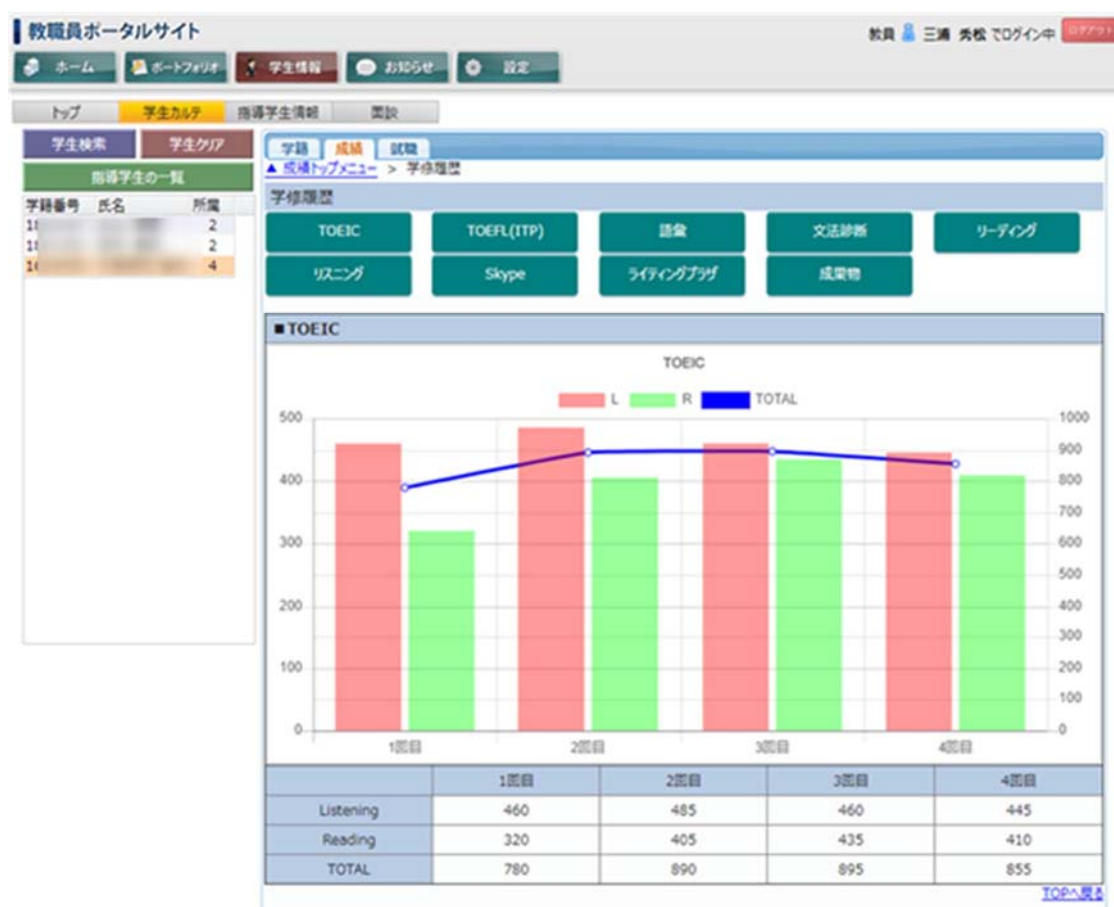


図 1 TOEIC の 4 年間のスコアの推移表示画面

- エッセイ（ライティング）画像登録
- スピーキング動画登録
- 卒業論文（卒業レポート）題目登録
- 卒業論文（卒業レポート）本文登録

科目の成績は数値として表されるが、カードで保存している学修成果は必ずしも科目の成績として数値化されない（または、できない）種類の学修成果を記録することが特徴となっており、通常の成績との重複も一部あるが、基本的に大学の成績評価システムとは差別化されている。学修成果のカードへの登録について、登録のタイミングは学科から指示を出す、登録それ自体は学生の自主的・自律的な取り組みである。現時点では、指示通りにアップロードを完了しているかどうか（カードへの学修成果のアップロード状況）は、科目の成績と単位認定のいずれとも連動していないが、学生は概ね指示通りに登録を行っている。また、4年（大英）ないし2年（短英）の学修の集大成である卒業論文（大英）と卒業レポート（短英）については、カードに蓄積されたその他の学修成果と併せて簡易製本し、卒業式の日に関学生に贈呈し、学修成果可視化の一環としている。

3.4 社会人基礎力の向上とビジネスマインドの涵養に向けて

経済産業省は、平成18（2006）年に「社会人基礎力」という概念を提唱している。これは、「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」の3つの能力からなり、「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」（経済産業省ホームページ）と定義されている。ここで注目したいのは「多様な人々」という部分である。当然ながら、この「多様な人々」の中には「自分と意見を異にする人々」も含まれる。

本節の冒頭で、今後ますます自立した個人として世界と向き合う必要が生じその際にポートフォリオを利用した活動が役割を果たすであろうという清田（2017）の指摘を紹介した。「世界と向き合

う」ということは、まさに、意見の異なる他者といかに折り合いをつけて共存・共栄していくかということに他ならない。意見の対立を乗り越えるためには、独善に陥ることなく、自分の考えや行いを客観的に振り返る力を養っておくことが重要である。清田の指摘を待つまでもなく、ポートフォリオがそのための有力なツールであることは間違いないであろう。

3.3節までの紹介で明らかのように、これまで本学科のポートフォリオ（カード）では学業に関連する成果のみをポートフォリオとして記録してきた。ポートフォリオというツールの大きな可能性を考えると、学業の面に限定せず、社会人基礎力を向上させるツールとして、また卒業後に社会で活躍するために必要となるビジネスマインドを涵養するためのツールとして、ポートフォリオの役割をより広義にとらえ、拡張していく必要があることに気づく。

大英および短英の学生に対しては、本学のキャリアセンターが毎年実施している「キャリアセミナー」、そして、次の第4節で紹介する学科独自の「就職セミナー」という2種類のキャリア形成支援イベントが数多く実施されている。現状ではそれぞれのイベントの独立性が高く、有機的に結びついているとは必ずしも言いがたい。すでに提供している各イベントをより一貫性のあるキャリア支援とするためにも、各イベントで感じたことや考えたことをポートフォリオに記録させ、イベントとイベントの間で自分の中でどのように意識が変わったか、また時間が経っても変わらない思いは何か、この2点を振り返らせることにより、より確かな自己分析につながることを期待される。このように、学業だけでなく、卒業後をより明確に見据えたポートフォリオの拡張を予定している。

4. 本学科の取り組み ② 就職セミナー

平成 11 (1999) 年、中央教育審議会 (以下、中教審) の『初等中等教育と高等教育との接続の改善について』(答申) により、我が国の教育分野において初めて「キャリア教育」という概念が導入された (佐藤, 2014)。この教育界の流れをいち早く取り入れる形で、本学大英および短英においても、平成 13 (2001) 年度より「就職セミナー・就職活動体験発表会」(以下、セミナー) を行なっている。本節では、本学科のキャリア教育の取り組みの一つとしてのセミナーを取り上げ、現状とその実施状況と問題点を述べる。

4.1. 実施状況

セミナーは毎年 5～6 度、課外で行われてきた。学生に人気のある航空やウェディングをはじめ、金融やアパレル・ファッション、インフラや出版・翻訳など各業界で活躍する卒業生やその他の業界人を講師に招き、1 時間程度の業界内容のプレゼンテーションと 30 分程度の質疑応答を行っている。また、内定が出揃う後期には戦略的に内定を勝ち取った大学生および短大生が就職活動体験談を発表する場としても利用され、下級生が業界に関する知識を深めるとともに、同じ学科で学ぶ先輩が切り拓いた「キャリアモデル」を知る機会を提供してきた。

また平成 27 (2015) 年度からは、受講対象を本学の全学生に拡大し、本学キャリアセンターの企画と並行して、学生の就職およびキャリア開発に資する情報を発信している。さらに令和元 (2019) 年度は、本学キャリアセンターとリクルートキャリア社の協力を得て、就職適性検査 SPI の準備講座も開催した¹。

¹ この講座については、参加者に好評ではあったが、令和元 (2019) 年 8 月に発覚したリクルートキャリア社による企業への内定辞退率情報の提供問題 (いわゆる「リクナビ問題」) の影響を考慮し、次年度以降の対応は未定である (「リクナビ問題」については、日本経済新聞 (2019 年 8 月 26 日付電子版)「リクナビ問題、個人情報保護委が初の是正勧告へ」の記事を参照のこと)。

4.2. 実施内容

ここで、過去二年間のセミナーを一覧に挙げる。

平成 30 (2018) 年度

- 5 月 25 日 (金) 営業職 (インフラ, 生花)
営業職の魅力とやりがい～国内外の実例を見てみよう!
- 6 月 29 日 (金) ウェディングプランナー
幸せをプロデュースする～ウェディングプランナーの仕事
- 7 月 5 日 (木) 客室乗務員 (CA)
客室乗務員への道のり
- 10 月 12 日 (金) アパレル
パンツ一丁で世界の舞台へ
- 12 月 18 日 (火) ファッション
紙上のファッションショー～ジャーナリストが語る取材・執筆・寄稿

令和元 (2019) 年度

- 6 月 14 日 (金) ホテル業界
内定者就職活動体験報告①
- 7 月 5 日 (金) 12 日 (金)
SPI 受験会～SPI に慣れよう
- 10 月 18 日 (金) 外資系ヘッドハンティング
ヘッドハンターが語る、本当にほしい人材とは
- 11 月 1 日 (金) 金融
内定者就職活動体験報告②
- 12 月 6 日 (金) 起業
ブランドを仕事にすること

このように、国内外のビジネス経験者を講師に迎え、さまざまな業界を目指す学生に対応しようとしている。なお、講師の許可を得られたものに関してはビデオ録画を行い、本学の LL ライブラリーに DVD の形式で保管して、希望する学生に貸し出すことで、学生のさらなる便宜を図っている。

4.3. 問題点

セミナーの参加人数は、厚労省発表の毎年 10 月 1 日時点での就職率（2019 年 5 月発表）が 60%を割り込んだ平成 23（2011）年 3 月卒業生が就職活動を行っていた平成 22（2010）年度は毎回 6-80 人程度を推移していたが、同 70%を回復した平成 25（2017）年度以降は、慢性的な人手不足に起因する「売り手市場」の就職活動状況を反映してか、参加者数が 10 人程度にまで落ち込むことも珍しくない。また、毎回の講師の確保も困難を極める。学科教員が卒業生や産業界で業界や就職について語れる講師を探し出して個別に交渉し、学生の希望や就職動向を伝えて質の高いプレゼンテーションへと落とし込んでもらうのは難しい。

4.4. 改善に向けて

以上から、セミナーが現在抱える問題として、(1) 積極的な学生参加、(2) 講師確保、(3) 学科取り組みの周知徹底が挙げられる。(1) については、学生側のニーズの把握に留まらず、興味を広げるような魅力ある業界研究の提案を通じ、より積極的な参加を喚起することが必要である。(2) については、担当教員の個人的コネクションに頼るだけでなく、地元産業界との安定した信頼関係を構築し、産業界の協力に基づいて講師の紹介を得るなど、大胆な発想の転換が必要である。(3) については、学内で DVD を閲覧させるに留まらず、講師や企業の下承を得て学科ホームページで情報を発信するなどし、「就職にも強い学科」として学内外へ強く訴求する取り組みなどが考えられる。

5. 本学科の取り組み ③日米企業研修

短英では、平成 22（2010）年度より、学科生全員が参加する企業研修を行っている。その目的は、充実したサポート体制を通して、入学直後より学生のキャリアに対する意識を高め、それによって、それぞれが学科で学ぶことの意味を考えながら、自らの目標をもって主体的に学習する姿勢を作り

出すことである。本節では、本学科の取り組みとしての日米企業研修を取り上げる。

5.1. 実施状況

学生は入学直後の 5 月、6 月、7 月に各 1 回外部講師によるキャリアデザインセミナーを受講し、ビジネスマナーや研修での心構え、キャリアに関する知識を学ぶ。実際の企業への訪問は、訪問先 1 社につき学科教員 1 名が学生約 15 名を引率する形で、8 月前半に行われる。令和元（2019）年度の訪問先は 7 社であり、その内訳はホテル 3 社、総合教育機関、総合建設業、物流、醸造業であった。

5.2. 実施目的

この日本における企業研修は、短英「日米企業研修プロジェクト」の一環として行われ、短英の学生は、1 年次後期 4 か月間に全員参加で実施される MFWI 留学中にも、現地で企業研修を受ける。学生は、まず MFWI のアメリカ人教員が担当するアメリカン・スタディーズの授業で、アメリカのビジネスの特徴や訪問先企業について学び、その後地元企業で研修を受ける。過去の訪問先企業には、ホテル、食品小売業、食品貿易業、物流業、NPO 団体、建築事務所などが含まれる。アメリカでの企業研修には、キャリアへの意識を高めるという日本における研修と共通する目的に加え、起業家精神やサステナビリティが重視され、また、英語が使用され文化的な多様性にも富むアメリカの職場を実際に目にすることで、グローバルな視野を養う意図がある。留学からの帰国直後には、4 回目のキャリアデザインセミナーで日米での研修を振り返り、来る就職活動に向けた意識付けを行う。アメリカでの企業研修は、大英のエクステンションプログラム（2 年次前期の全員参加のレギュラー・プログラムに続いて、2 年後期に希望者が参加して実施される 4 か月間の留学プログラム）を対象としても実施される。

6. 本学科の取り組み ④ サービスラーニング活動の立ち上げ

先に述べたように、国内製造業の生産拠点の海外移転が進み、新興国の経済発展を背景に海外市場への進出が加速するグローバル経済において、本学周辺地域の中小企業も国際業務に対応できる人材育成の要求が高まっていると考えられる。また、日本国内の人材不足に直面し、留学生を含む外国人雇用という内なるグローバル化に苦慮している企業も想定される。このような状況下、本学科と地元企業を繋ぎ、互いを利する仕組みの構築が急がれる。本節では、本学科の取り組みとしてのサービスラーニング構想を取り上げる。

6.1 大英・短英のサービスラーニング活動

本プロジェクトでは、西宮市を拠点とする中小企業の国際的な業務へグローバルマインドを持つ有志学生が参加する経験学習プログラムを予定している。これは、自ら考えて、海外の組織や企業と交流し、業務を推進できる人材を地元企業と共に養成する取り組みである。そして、知識伝授型授業に相いれない教室外学習を含めたサービスラーニングとして、中央教育審議会（2002）が提唱する「社会の要請に対応した社会貢献活動に学生が実際に参加することを通じて、体験的に学習するとともに、社会に対する責任感等を養う教育」を目指している。

6.2 学生と社会を融合する経験学習

MFWI でのアメリカ留学を通じて、異なる文化背景を持った他者との交流や英語コミュニケーションスキルを高めてきた学生が、地域企業に自ら足を運び、国際業務担当者と一定期間の仕事へ協働する活動を計画している。これまでも、そしてこれからも英語力の必要性が謳われている英語教育ではあるが、コミュニケーションツールとして英語を使用し、海外業務に従事している日本人の業務を経験する機会の享受は、授業や大学で高め

るべき英語コミュニケーション力と英語スキルは何かを実践的に考える社会体験の基盤となっていく。学生のこうした社会経験と教室での学びの融合として、グローバル化に向けた英語コミュニケーションに必要とされる英語ニーズを顕在化させていく調査・検証が経験学習となっていくと期待している。

6.3. 教育的なかかわり

辻（2014, 2017）の科学研究費助成金事業の成果報告書で指摘されているように、ビジネス英語教育の充実はグローバル展開を進める企業や大学において重要な課題となっている。この点、サービスラーニングの教室外学習の成果は、上記で述べたような学生自身の経験と自らの省察を基に、具体的な英語ニーズや必要とされる国際業務スキルを企業と共有するだけでなく、地域社会で学ぶ中高生や大学生、そして社会人に向けて、英語コミュニケーションの目標と目的を具体的に提示することが、将来的な教育活動の展望である。川田（2014）が指摘するように、サービスラーニングは、教育の枠組みの中で課されていく活動であり、ボランティア活動だけの奉仕ではない。国際業務の実践現場を体験する学生が、自らの社会経験を活用し、グローバル人材育成に向けた英語スキルを磨く英語教育プログラム考案などに協同作業を進めていき、地域社会へ発信可能となる実践的なアクティブラーニングへと結びつける試みを予定している。

7. 結論

本稿では、主に大英における「キャリア教育」の現状と問題点を概観してきた。大英が育成を目指す人材は「卒業後の早い段階からビジネスシーンで活躍できる有為な学生」であり、これはビジネスの世界で時として問題視される「指示待ち人間」ではなく、状況を自分で適切に判断し行動できる人材である。このような人材は、どのような

キャリアパスにあっても、自発的に新しいことを学び吸収しつつけていく姿勢を持ち、自己研鑽のできる、自己向上能力を有した自律型学習者である。このような人材育成を達成するための仕掛けとして、大英においては、就職セミナー、日米企業研修などを行ってきた。しかし、現在これらの試みは学科の中で互いに独立したプロジェクトとして行われており、個別に見ても学科が負担する物心両面のコストに対して満足な効果を上げておらず、また複数のプロジェクトが十分なシナジーを生み出しているとも言いがたい。

このような問題を解決するのが、本研究プロジェクトで軌道に乗せようとするサービスラーニングの仕組みである。この仕組みにより、学科および大学の閉じた自助努力のみならず、地元企業を中心とした産学協同体制を通じて、学生の中に生きた「学びのサイクル」を完成する。さらに、このサイクルの中で得られた経験や能力を記録したeポートフォリオにより、学生は自らのエンプロイアビリティを客観的に分析、自らに足りない部分を把握して新しい課題を自らに課していくことで、自律型学習者として学び続ける姿勢が涵養されることが期待されるのである。

参考文献

- 川田 虎男：大学教育における、サービスラーニング導入の可能性について、聖学院大学総合研究所 Newsletter、23 巻 3 号、7-25、2014。
- 清田 洋一：英語学習ポートフォリオの理論と実践：自立した学習者をめざして、くろしお出版、2017。
- 経済産業省ホームページ（社会人基礎力）：
<https://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/index.html>（2020 年 1 月 31 日閲覧）
- 厚生労働省：大学等卒業予定者の就職内定状況調査（大学・短期大学・高等専門学校及び専修学校卒業予定者の就職内定状況等調査）：結果の概要、2019。
- 財務省ホームページ（財務省貿易統計）：
<https://www.customs.go.jp/toukei/info/>（2020 年 1 月 31 日閲覧）
- 佐藤 敬子：大学生のキャリアデザインについての一考察：かかわ

りとガイダンスを通して、別府大学紀要、55 号、167-77、2014。

辻 和成：企業での英語コミュニケーション最適化における英語教育の調査研究、科学研究費助成金事業（2011-14）「研究成果報告書」

<http://kaken.nii.ac.jp/d/p/23520779.ja.html>（2020 年 1 月 31 日閲覧）

辻 和成：大学と企業における実践的 EBP 教育の展開と接合、科学研究費助成金事業（2014-17）「研究成果報告書」

<http://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-26370647/>（2020 年 1 月 31 日閲覧）

辻 和成：経営のグローバル化と英語教育－企業英語研修の実態調査からの考察－、応用言語学の最前線－言語教育の現在と未来－、金星堂、295-312、2017。

中央教育審議会：初等中等教育と高等教育との接続の改善について（答申）、1999。

中央教育審議会：青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について（答申）、2002。

中央教育審議会：新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）、2012。

独立行政法人 中小企業基盤整備機構：中小企業海外事業活動実態調査報告書、2017。

日本経済新聞（2019 年 8 月 26 日付電子版）：リクナビ問題、個人情報保護委が初の是正勧告へ

<https://r.nikkei.com/article/DGXMZO48995010W9A820C1MM8000>（2020 年 1 月 31 日閲覧）

健康づくり及び食育活動に関する地域と大学の連携の新しい展開

内藤 義彦

武庫川女子大学 生活環境学部 食物栄養学科

西宮市における健康づくりの推進に資するため、定期健康診断結果より西宮市在住の学生のデータを抽出し、一人暮らしの学生とそうでない学生（自宅や親戚宅等）とで比較し、健康課題を検討し、その一部を報告した。また、西宮市保健所と連携した食育学生ボランティアの活動の一端を紹介する。

キーワード：社会連携、地域、若年女性、生活習慣、食育、学生ボランティア

1. はじめに

高齢化と少子化が急速に進行するわが国において、持続可能な社会保障制度の構築は喫緊の課題であるが、その対策の一つとして生活習慣病対策とともに疾病・介護予防が注目されている。基本的な方向性は「健康日本21（第2次）」等を示されているが、その中で地域のつながりの強化や生涯を通じた生活習慣病予防体制の構築が社会連携活動に通じると考える。

「健康日本21（第2次）」の西宮市版である「にしのみや健康づくり21（第2次）」が策定されてから6年が経過し、一昨年度に中間見直し版を策定し、現在、それに基づく事業が始まっている。

これまで、市の健康づくり事業に対して、武庫川女子大学は計画策定等（発表者は策定委員として参加）として関わるだけで、西宮市の進める具体的な事業の企画や評価・活動推進に直接関与してこなかった（食育の計画もほぼ同様な状況）。

西宮市保健所は、市の健康づくりに関連する調査や事業に対する新しい人材やアイデアを求めており、また西宮市在住の若い世代の健康状態について情報不足を憂えている。本研究事業は、これらの問題解決に対する貢献が期待される。

2. 研究事業の概要

健康づくりに関する西宮市との連携事業としては、当初、様々な内容のものを企画したが、まずは着手し易いものから始め、効果を評価したのちに次の企画に進むこととし、本年度は二つの事業をパイロット研究として実施した。

2.1 西宮市の若い世代の生活習慣と健康課題

生活習慣病予防の根本的な対策の一つとして、若い世代における望ましい生活習慣の確立が挙げられる。生涯で考えると、学童期から思春期までは学校保健が中心とした食育や保健教育が行われ、一定の効果を挙げている。また、40歳以降は特定健診・特定保健指導を介した生活習慣の把握と保健指導の体制が曲がりなりにも整備されている。問題は、20～30歳代の世代のデータ不足と生活習慣改善の啓発の仕組みが不十分である。そこで、本研究では、武庫川女子大学の定期健康診断結果より、西宮市在住の学生のデータを抽出して集計した（個人情報保護の上）。

2.1.1 対象と方法

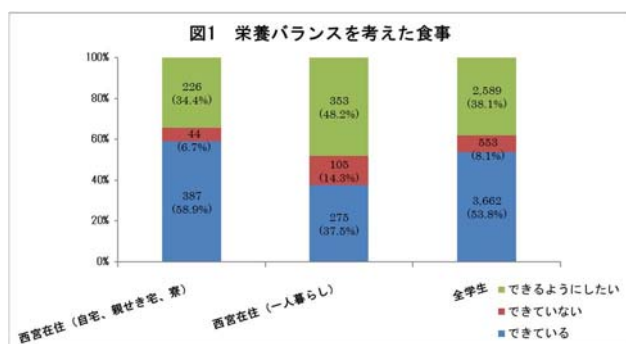
武庫川女子大学全学生数9,907人（令和元年度健診受診者数9,509人）のうち、西宮市在住学生数1,979人（西宮在住学生令和元年度健診受診者数1,920人の定期健康診断結果を抽出した）。

この健診データを用いて、西宮市在住（自宅、親戚宅、寮）、西宮市在住（一人暮らし）、全学生

の3群間で、BMI等の健診所見及び生活習慣を比較した。

2.1.2 結果

BMI（体格指数）の割合は西宮在住学生と全学生との傾向は大きな差はなかった。本学の結果は、「学生の健康白書2015」と比べると低体重の割合が平均より上回っていた。朝食の摂取状況は、一人暮らしの「毎日朝食を食べていない」の割合が高かった。また、「栄養バランスを考えた食事」を「できるようにしたい」と「出来ていない」の割合がともに高かった（図1）。自宅や寮の学生は自分で食事の準備をすることは少ないがバランスのとれた食事が摂れていると思われる。睡眠は、3割の学生が不眠症状ありと回答しており、中でも一人暮らしの割合が高かった。一人暮らしの飲酒の割合が全体より多かった。タバコは全体では33人の学生が吸っていると回答しているが、西宮在住の学生（自宅や一人暮らしを合わせて）だけで10人が「吸っている」と回答していた。一方、西宮在住学生は全学生に比べて「30分以上の運動」を毎日または週に数回行っている割合が高かった



2.1.2 考察

単純集計ながら、西宮市在住の若年女性の健康課題の一端を垣間見ることができた。痩身傾向の問題、一人暮らしの生活習慣の問題等が明らかになり、それに沿った介入計画の立案と実施が可能になる。ただし、武庫川女子大学の学生に特有な問題の可能性もあり、安易に一般化するのは慎重であるべきであろう。今後、他大学との情報交換等を通じて、幅広い対象で確認する必要があると考える。

2.2 食育学生ボランティア活動を通じた連携

現在、西宮市保健所が募集し一部の学生も参加している食育ボランティア事業がある。今年度はその活動を強化し、武庫川女子大学の大学生が中心となって若い世代向けの食育教材を作成し、その成果物についてアンケート調査を実施し、教材の改良のヒントを得るとともに今後の連携のあり方を強化することを目的とする

2.2.1 方法

西宮市保健所の管理栄養士の指導の下に、食物栄養学科の学生が食育教材を作成した。それらを武庫川女子大学の食堂にお昼時に数日間設置し、教材の内容について、アンケート調査を実施した。

2.1.2 結果

成果物は以下のとおり。



アンケートの集計結果は発表会当日に報告する。

2.2.2 考察

時間と予算の関係で、多種類の教材は作成できなかったが、今回のパイロット研究を踏まえ、今後は開発に参加する学生の数を増やして続けたい。また、他のアプローチについても、学科を越えた人材を募集し、より訴求性の高い教材を作成していきたい。

3. 今後の研究事業の展開

今回のパイロット研究を踏まえ、今後は健康サポートセンターの責務として若年女性のヘルスリテラシー教育を推進していきたい。

大阪府豊能町における“健康まちづくり”の試み -公園を活用して住み続けたいまちづくり-

三好 庸隆

武庫川女子大学 生活環境学部 生活環境学科

「オールドニュータウン問題」への対処方法のひとつとして、そこで何十年と暮らしている住民の方々の「健康」をキーワードとしたそこでの暮らしのあり方、まちづくりのあり方についての研究はこれからの日本のまちづくりにとって極めて重要である。

このような背景から2017年4月に大阪府下で最も高齢化が進んでいる豊能町とまちづくりを検討するための連携協定を締結し、町で初期に開発されたニュータウンである「ときわ台」地区等をモデル地区として「健康まちづくり」をテーマに研究・教育活動に取り組んでいる。

2017、18年度は主として高齢者の健康状態の評価や、坂道が多い住宅地での転倒防止などをテーマとした健康体操づくりに重点を置いた。

2019年度は都市空間に視点を移行し、公共用地である街区公園の利活用をテーマに、ときわ台・東ときわ台の街区公園の利活用状況を調査検討した。

20年度は19年度調査に基づき、街区公園の利活用度を上げていく方策について町とともに検討し実践的に取り組んでいく予定である。

以下に示すのは2019年度の三好研究室ゼミ生 飯田菜緒子さんの卒業論文「郊外住宅地での健康まちづくり [その3] -大阪府豊能町ときわ台街区公園の活用に関する研究」の要旨である。

キーワード：健康まちづくり，豊能町ときわ台・東ときわ台地区，郊外住宅地，街区公園

1. 研究の背景

健康まちづくりに取り組むきっかけとなったのは、近年問題となっている少子高齢化が加速し、郊外住宅地でのコミュニティ形成の場が不足していることから、公共用地である、街区公園の利用の減少、活性化について着目したからである。そこで、2017年度4月から武庫川女子大学と協定を結んでいる、大阪府豊能町を対象に、建設環境部の皆様、住民の皆様にご協力いただき街区公園のあり方や、活用方法、まちづくりのあり方についての実践的研究に、前年度に引き続き取り組むことが可能となった。

2. 研究の目的

本研究の大きな目的は、「郊外住宅地での健康まちづくり」であり、健康を中心として、まちづくりやコミュニティがどうあるべきかを考えた。本研究における健康とは、高齢社会において今後ますます重要となってくる「健康寿命」を延ばすことである。本研究は街区公園の利活用を中心として、ときわ台地域での健康まちづくりについて取り組んだ。

3. 研究の方法

本研究は前年度に引き続き、大阪府豊能町を中

心とした実証的研究である。大阪府豊能町東ときわ台地区の街区公園を対象とし、公園の利用状況の調査を行った。調査の内容については、全11ヶ所の公園を朝と夕方の計2回訪れ、写真撮影を行い、利用人数や、利用内容について記録を録った。さらに、東ときわ台、ときわ台地区の自治会役員を対象にしたアンケート調査を実施し、過去と現在の公園の使用状況を比較した。今後の公園についての考えも伺った。

4. 大阪府豊能町について

豊能町は大阪府の北部に位置し、箕面市や兵庫県川西市に隣接している。面積は34.37km²で、標高600mを超える北摂連山の中にある。東ときわ台、ときわ台地区には坂道が多く、特に急な箇所では10%の道路勾配が見られる。豊能町の人口は19,403人（2019年10月末時点）である。図1-3より、1980年前後から増加し、1995年に人口のピークを迎え、26,613人となったことがわかる。しかし、1995年以降の人口は減少の傾向にあり、2010年には、21,952人となっている。豊能町全体だけでなく、豊能町内の各地域でもほとんどの地域で高齢化率が約50%以上となっており、豊能町全ての地域で少子高齢化問題が深刻化している。



図1 大阪府地図

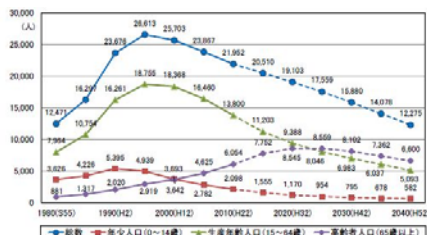


図2 豊能町人口ビジョン

5. 東ときわ台街区公園現地調査

この調査では、東ときわ台の11公園の現在の利用人数や利用内容などを明らかにし、状況を把握することを目的としている。

10月6日(日)	10月8日(火)	11月14日(木)
9:00~10:30	9:00~10:30	9:00~10:30
16:00~17:30	16:00~17:30	16:00~17:30

表1 調査記録スケジュール

街区公園現地調査では、利用されている公園と利用されていない公園が大きく分かれる結果となり、午前中よりも夕方の時間帯の方が人は多かった。平日と休日でも、大きく差はなかった。3回の現地調査のなかで、よく利用されていた公園は、2丁目2号公園であった。夕方になると小学生が遊んでいる。しかし、街全体を見ると、高齢者とすれ違うことが多いため、オールドニュータウンということを感じた。10月の2回の調査では、すれ違う人も多かったが、11月の中頃の調査では、すれ違う人も少なく、街は、閑散としていた。考えられる理由としては、気温が下がったためかと思われる。13℃ではあったが、山風が吹くことや、日陰になると、体感では、10℃くらいになるため、夕方から夜にかけては、厳しい寒さになっていた。



図3 東ときわ台街区公園

6. 東ときわ台自治会役員へのアンケート調査

6.1. アンケートの趣旨

今回のアンケートの趣旨は、回答者本人ではなく、近隣住民の街区公園の利用について聞いている。(1)現在の利用状況 (2)過去の利用状況 (3)今後の利用についてという三部構成で行った。そのため、一般住民ではなく、東ときわ台と、ときわ台の自治会役員の皆様にアンケートを配布し、協力していただいた。このアンケートからは、現在と過去の利用状況を比較し、今後の利用促進を図ることを明らかにすることを目的としている。

	配布人数	回収人数
東ときわ台	19名	12名
ときわ台	28名	12名

表2 アンケート配布人数・回収人数

6.2. アンケートの結果

・東ときわ台

現在の利用状況は、利用されている公園とされていない公園で、極端にわかれることがわかった。

近隣住民が利用している公園は、3丁目公園が一番多いという結果だった。その次には、2丁目2号公園、4丁目公園、6丁目(中央)公園だった。3丁目公園は、前ページ図4-1にあるように、東方向に向けて、4丁目公園、5丁目1号公園と続いており、隣には、オアシス(スーパー)があり、買い物に行くときや帰るときに利用されることが多いと推測される。

2丁目2号公園は、現地調査やインタビューを行った際にも、実際に小学生が遊んでいることが多く、コンクリートの大きな滑り台があることも利用されている理由の一つではないかと考えられる。4丁目公園は、3丁目公園とほぼ同じ結果となった。6丁目(中央)公園は、遊具のある場所もあるが、大きなグラウンドがあり、動きやすいため利用しやすいと考えられる。

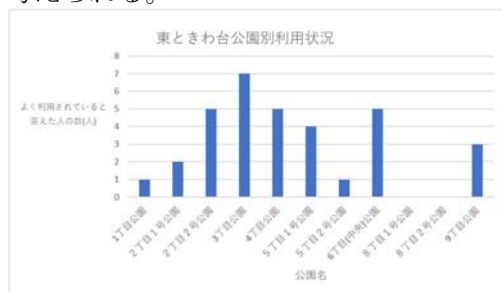


図4 東ときわ台公園別利用状況

・ときわ台

ときわ台地区の街区公園では、東ときわ台と同じく利用されている公園と利用されていない公園で大きく差がついた。4丁目公園は、大通り沿いに位置しており、他の3ヶ所の公園より入りやすいため、よく利用されていると言える。

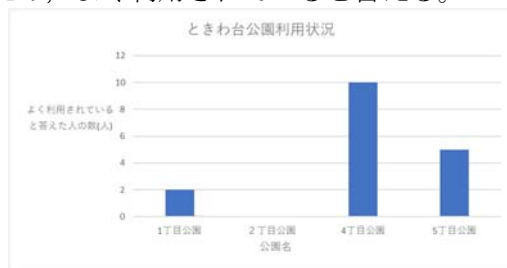


図5 ときわ台公園別利用状況

設備に関する意見

- ・ベンチの設置等、休憩空間の整備等
- ・水道の設置
- ・トイレの設置
- ・キレイなトイレがあれば散歩中に立ち寄れる。
- ・遊具やベンチなどのメンテナンス
- ・キレイなベンチ、トイレを作る。
- ・公園をきちんと整備する。(トイレ、ベンチなど)

新たな場所を作る意見

- ・アスレチック、運動できる遊具を作る。
- ・雨でも利用できる屋根を作る。
- ・ドッグランを作る。
- ・遊具はあまりおらず、安心して走り回れる広々とした場を作ること。
- ・自然と触れ合える遊び場づくり

高齢者に特化した意見

- ・公園の利用が子ども対象であったが、最近の子どもの減少から、大人の交流の場としても利用できる様にすることはどうか。
- ・少子化の時代、子どもの利用度が低い。地域的に高齢化に添った、公園の在り方、"おちつける"公園作り等

その他

- ・子どもの数が減っているので、遊び場というより、住宅街内の緑地という位置付けで整備していけばいい。

草木・花に関する意見

- ・花をいっぱいにする。
- ・樹木や石垣などの整備。
- ・見晴らしをよくする。
- ・草木の手入れをする。
- ・雑草の除去が繁にできていれば虫等が少なく、高齢者にも利用しやすいのでは。
- ・草木の手入れがされていたら、利用する方が増えると思う。(トイレの設置など)

高齢者と子どもの多世代交流の意見

- ・お年寄り(ホーム)と子ども(保育所、幼稚園)が一緒に玩儿れるようなイベントの目を決めて行う。
- ・地域の住民交流の場が少なく、その場として活用できれば。

子どもに関する意見

- ・子どもが遊ぶスペースもゆとりととる。
- ・子どもの遊び場

図6 東ときわ台自治会役員の意見

環境に関する意見

- ・くつろげるベンチ
- ・休息場所に
- ・(4・5丁目公園)設備(トイレ水道など)を整えて利用しやすくすることが必要と思う。
- ・明るくしてほしい。
- ・広さと環境の良さが必要。
- ・住民の方には見えないように、かつ、道路の面からは防犯上見通しよくした方がいい。
- ・清潔で防犯面で安全な場所

草木・花に関する意見

- ・草木の手入れをすること
- ・周辺を含め草木の手入れ
- ・キレイなベンチ、草木の手入れ等、定期的にしてほしい。

高齢者に特化した意見

- ・高齢者の交流の場所
- ・高齢者が多いので、高齢者の健康増進のための器具などを置けばいいのでは。
- ・高齢者の利用を増やしたい

その他

- ・子どもは少ないから、利用できる遊具の選別をした方がいい。

子どもに関する意見

- ・広いグラウンドのような広場と小さな子どもが遊べる公園を入目の多い場所に整備

高齢者と子どもの多世代交流の意見

- ・昔ながらの紙芝居等、子どもから大人まで楽しめる催し
- ・外でできるものづくり体験等、住民の方の得意なことを子どもたちにも教えてあげられる機会の場。

新たな場所を作る意見

- ・広いグラウンドは使用できる時間も限られている、数も少ない、のびのびと軽スポーツできるような広場

図7 ときわ台自治会役員の意見

7. のせでんアートライン2019」での街区公園を活用したアートプロジェクト

7.1. 「逆オンバシラ祭り」参加者へのインタビュー調査

5丁目1号公園の活用の有無や、活用内容を、明らかにすることを目的とした。結果は、30代の女性は、幼稚園、小学生の子どもと一緒によく利用しており、夕方や休日は賑わっているという意見

であった。しかし、少し上の40～50代の男性は、子どもの絶対数が少なくなっているため、閑散としていることが多いという意見であった。10年前は、もう少し子どもが多いことなどから、利用していたようだが、現在は利用することが少なくなっているようだった。さらに、この5丁目1号公園の他には、2丁目2号公園をよく利用するという意見があった。やはり、大きな遊具や走れる広さがあると利用しやすいと言える。



図8 逆オンバシラ祭りでの風景

8. まとめ

東ときわ台地区では、住民の多くの人が公園の利用方法やコミュニティに関することに興味をもっていったことがわかった。現在は利用されている公園と利用されていない公園が極端であり、高齢化が進んでいるとはいえ、子ども世代と高齢者世代の多世代交流、コミュニティの形成が大切ということがわかった。しかし、トイレや水道の設備を整えることや、古くから残っている遊具など、以前から変わらない公園の環境を見直し、地域に合った、時代に沿った公園の使用方法を検討する必要がある。さらに、街をあげてするイベントには協力的であることや、大人だけでなく、子どもも参加できるイベントをするということから、コミュニティ形成の場を大切にしているということが伺える。

9. 参考文献

・伊藤有希：郊外住宅地での健康まちづくりー大阪府豊能町ときわ台における実践的研究その2ー, 2019

MEMO

第4回 武庫川女子大学
「研究成果の社会還元促進に関する発表会」

発行日	2020年2月21日
発行	武庫川女子大学 教育研究社会連携推進室
連絡先	〒663-8558 兵庫県西宮市池開町 6-46
TEL	0798-45-9854（直通）
FAX	0798-45-3684
E-mail	shakai@mukogawa-u.ac.jp